

I S ~ULTRAMAN- DYNA~

素粒子先輩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▼地球を救った英雄「ウルトラマンダイナ／アスカ・シン」が迷い込んだ世界は、インフィニットストラトスと呼ばれる女性にしか扱えないパワードスーツが存在する世界だった。▼何故かアスカはそれを扱うことができ、IS学園というIS操縦者を育成する学校に急遽入学すること?!▼IS×ウルトラマンダイナという趣味100%で書いたクロスオーバー小説です。何番煎じかわかりませんが、暖かい目で見守ってくれば幸いです。あとネットスラングはたまに使用することがあります。

ちよいちよいタイトル変えることがあるかもしれません（小声）

勝手なこととしてすいません！許してください！なんでもしますから！

目次

| | |
|----------------|-----|
| プロローグ | 1 |
| 巡り合う運命 | 4 |
| 命懸けの入試 | 14 |
| 青春のリスタート | 21 |
| 荒鷲根性《ガッツイーグル》! | 37 |
| 変身の瞬間(とき) | 56 |
| 灼熱地獄の奇跡 | 69 |
| 男と男(?)の友情 | 79 |
| 僕のヒーロー | 101 |

プロローグ

ここは……どこだ……

真っ暗で……何も見えない……

深くて……重い闇だ……

俺は……生きているのか？

それとも……死んだのか？

あの時グランファイアをぶつ倒して……光に包まれて……親父に会って……

そこからの記憶が無いんだ……

あれは……夢だったのか？

ここは、ここは何所なんだ！

教えてくれ！誰か！

誰か！

誰かいないのか！

その瞬間、ウルトラマンダイナ／アスカ・シンを包んでいた暗く深い闇がその声に共鳴するかのようになんか暖かく眩しく、そして優しい光によって消されアスカの身体も光に包まれた。

アスカ「光……？」

アスカ「何なんだ…？この光…」

光の中でも一際強い輝きを持った光がある方向へ伸びているのをアスカは発見した。

アスカ「あの方向へ行けば…帰れるのか？…行ってみるか！」

アスカ「でも…三途の川の入り口だったら…」

…
どうしようかな…

そんなことを考えていたその時、

…
テ…ケテ

誰かを呼ぶような声がする。明らかに自分の声ではない、別の誰かの声。

アスカ「誰だ！誰か俺を呼んだか？」

…
スケテ　タスケテ！

タ・ス・ケ・テ！

アスカ「助けてだって？でもどこだ？」

辺りを見渡しても人なんかいるはずもない。

アスカ「まさか、あの光の指す方向へ行けば何かわかるのか？」

でも地球に戻れなくなるかも…　でも誰かが助けを求めて

るんだぞ！…いやでも…ああもうわかんねえ！どうすりゃい

いん——

タスケテ!!!

アスカ「…そうだよな、誰かが助けを求めてるんだ。このまま放っておいてとんでもないことになったら、死ぬまですつと後悔する。そんなのは絶対に嫌だからな」

自分にそう言い聞かせる。帰れなくなっても…みんなはずつと待っていてくれると思う。でもちよつとは、『帰れるかも』って期待はあるんだ。

アスカ「でも仮に帰れたとしても、あの手この手でこの声の主を助けに行くんだろうな…　へへッ」

自分でもわかってる。俺はそういう馬鹿だ。お人よしの大馬鹿野郎さ。

アスカ「今行くぜ……みんな！」

アスカは拳を握りなおした。

アスカ「よっしやあああああ！行くぞおおおおお！」

アスカは光の示す方向へ走り出した。元の世界か、天国か、はたまた地獄か。

アスカは一步、一步を大切に踏みしめていく。勇気のある大きな一歩を。

しかし、この歩みはアスカの新たなる戦いの場へと向かっていた。

巡り合う運命

アスカ「……………」

アスカ「…！」

アスカ「ここはどこだ…？」

アスカは妙な空気が漂う部屋で目覚めた。その部屋は薄暗く、少し寒い。

しかし、そんなことがどうでもよくなるような異様な存在が部屋の中心に置かれていた。

アスカ「なんだ… あのロボット…？」

それは、かつてTPCで開発された衛星探査用ロボット「TM-39」通称：ラブモスを彷彿とさせる形をしており、それでいて刺々しい攻撃的なフォルムをしている。

…何だこれは…

アスカは好奇心を駆られ恐るおそる近づいていった。

アスカ「やっぱり… ロボットだよなあ…」

そしてなんとなく手を触れてみたその時、

キンツ と金属音が頭に響いた。

アスカ「な、何だ?!」

突然、機体が青白く光り出した。

そしてアスカの脳におびただしい数の意味不明な情報が流れ込んできた。

アスカ「なんなんだよ… これ…」

.....気持ち悪い.....

アスカはそう思った。

無理もない。その意味不明な数多の情報全てを理解できるのだ。

この機体の操縦方法、性能、特性、装備、活動時間、行動範囲、
tc..... e

頼みもしないのに止めどなく流れる。

肌の上に何かが広がってく————皮膜装甲展開《スキンバ
リアーオープン》

突然体が軽くなる無重力感————推進機《スラスタ》正
常作動

右手に装備が形成される。 ブレード装備完了。

ハイパーセンサー最適化終了。

アスカ「訳解んねえよ..... なんなんだよ.....」
そして最後の情報が流れた数秒後.....

タ

ス

ケ

テ

ダ

イ

ナ

アスカ「！」

この機体の情報ではない「何か」が流れた。

しかしそれはアスカの脳の中で他の情報と共に果ててしまった。

アスカ「なんだったんだ？……」

アスカ「しかも肝心なコイツの名前は教えてくれなかったし……」
機体を叩きながら呟いた。

アスカ「それに……最後の……」

あれは何だったんだ……

思い出そうとしても思い出せない。

もどかしい気分だ。

しかし考える暇は与えてくれなかった。

ガチャと扉を開ける音がしたのだ。

アスカ「ん？」

見ると女性二人のようだ。

その時、アスカの中にあつた緊張や不安という紐が緩んだようだった。

やっと人に会えた。外の景色もほんの少しだけ見えた。

道路が敷いてあり、車や人が通っていた。

恐らく、いや絶対にここは自分が生まれ育った故郷、「地球」だ。

アスカ（やった……！俺は帰ってこれたんだ！）

アスカ（早く戻って隊長たちをびつくりさせてやろう！）

口に不思議と笑みがこぼれる。

あの光に向かって進まなかったら…… 考えただけで寒気がする。

でもこうやって帰ってこれたのだ。やっぱり俺は「不死身のアスカ」だ。

そう考えてるうちに一人が口を開いた。

女1「あなた誰？」

アスカ「俺？俺は「嘘?!この人I Sを起動させてるわよ!」
格好良く名前言うおうとしたのに……… まあいいや

I S——恐らくこの機体の名前だろう

女1「え?…なんで?!女性しか動かせない筈なのに!」

女性しか動かせないらしい………え?

女 性 し か 動 か せ な い

じゃあなんで俺が動かせるんだよ!

あれか?俺のどこかに女性としての意識が眠っているのか?

んな訳あるか!俺は高校時代バリバリの野球部、しかもピッチャー
だったんだぞ!

控えだけど……

でも朝起きたら女になってました〜♪なんてことになったらどう
しよう……

そうだったらS—GUTSのみんなになんて言えばいいんだ……
走り方が女っぽいと言われたこともあるけど、それはもう直した
し……

アスカが深刻に考えている中、一人が口を開く。

女2「とにかく報告よ!」

!! 危ない危ない、考えにはまるとこだった。

それで報告ってなんだ? どこに報告するんだ?

女1「あなた、名前は?!」

さつき言おうとしたの妨げたくせに……… まあいい。

俺はそんなグジグジ愚痴をこぼす男ではない。
常に前向きに生きるのが俺の信念だ。
ここは格好良くバシツつと決めるか！

アスカ「俺はアスカ・シン」わかった、アスカ君ね！」
最後まで俺の話を聞かず、名前だけ聞いて二人は部屋を後にした。

さて、ここが地球だと解った以上いつまでもここに留まる理由は無
い。

アスカ「俺も出るか…」
部屋を出て一歩、また一歩と出口へ向かう。

＼カシャン／

足元に何かが落ちる感触がした。

アスカ「あ、いけね」

アスカは素早くそれを拾い上げ汚れを払った。

「リーフラッシャー」

アスカがダイナに変身するための必須アイテムであり、命と同じく
らい大切なものだ。

アスカ「よかった〜 失くしてたらどうしようかと思った〜」
再び安堵を得てアスカは外へと踏み出した。

外へ出ると眩しい太陽がまるで自分の帰還を祝福してくれている
ようだった。

アスカ「俺が… 守ったんだよな…」
アスカは誰にも聞こえないような声で言った。

アスカ（それにしても何か変だな…）
アスカ（何か違和感があるんだよなあ…）
たとえば掲示板だ。ボードや立てかけるものも無く宙に浮いてい
る。しかもデジタル式
本部とかで幾度と無く宙に浮く映像は見たがこんな街中で、しかも
何気ない掲示板と来たものだ。
そんな光景を見てアスカは思った。

アスカ（まさか俺は未来に来てしまったのか？）
浦島太郎状態になっているのではないかと疑った。
アスカ「そうだ！コンビニに行つて新聞の日付を見れば西暦何年か
わかるぞ！」

そしてコンビニにて……
アスカ「は？」
それが新聞を見た第一声だった。
アスカ「に、2015年？」
アスカ「3年前!!」
客「うるさいよ」ア、スイマセン

なんでだ……？頭が混乱してきた……
俺がいた時代の3年前なのに？科学はこっちの方が発展してる？
それにさっきのISとかいう謎のロボット？
どうなってるんだ？

アスカが混乱してる中、
「あ、いたぞー」「捕まえる！」
女性の声が出た。何かを追っているのだろうか。
防衛隊員として俺も加担したほうがいいのかな……

そう、ふと考えていると・・・

二人の女性隊員が近づいてきて・・・

隊員「無事保護しました！」

何故か両腕をガツチリとロックされて「俺が」捕まった。

アスカ「なんなんだよ！お前ら！」

アスカ「なんで俺が捕まらなくちやいけないんだよ！」

隊員「アスカ・シン、よく聞きなさい。あなたをI S学園で保護します。」

アスカ「理由を話してくれよ！」

隊員「I Sが女性にしか動かせないというのは承知してますね？」

アスカ「ああ……」

不安を煽られるからその話題は出して欲しくなかった。

隊員「ですが、あなたは何故か動かさせた。今や世界的大ニュースですよ。」

隊員「さて、そこで問題です。あなたのことを調べさせて欲しいと各国から押し寄せたらどうしましょう？」

隊員「そしてそれを日本が意地でも阻止したら。」

アスカ「阻止したら……」

隊員「はい、このご時勢ですから世界的な争いが勃発します。」

アスカ「そんな……！」

せっかく取り戻した平和を人類自らの手で壊させてたまるか！

隊員「ですがI S学園に所属している生徒に対してはありとあらゆる国家・組織・団体は介入できないという特記事項があります。」

アスカ「つまり……そのI S学園とやらに所属している以上は大丈夫というわけか……」

隊員「その通りです。で、保護には一応同意が必要なのですが……」

アスカ「……わかった。そのI S学園とやらに行くよ。」

隊員「ご理解感謝します。」

アスカ（真相を確かめるには今しかない。）

アスカ「ちよつといいか？」

隊員「はい？」

アスカ「これを知ってるか？」

アスカはポケットに入れてあったウルトラマンティガの写真を出して見せた。

(ちなみにこれはイルマ参謀からこっそり貰った写真だ)

【ウルトラマンティガ】

ダイナが現れる以前に地球に現れた巨人であり、世界を滅ぼすために復活した邪神を、光になった世界中の子供達と共に打ち倒し、平和を取り戻した伝説の超人である。

アスカと同じ地球人「マドカ・ダイゴ」が変身しているが、今はその情報はTPCの中でもトップシークレットの情報となっている。

邪神戦以降変身する力を失っていたが凍結前のF計画事件の時に力を取り戻した。

アスカ(ここは2015年、つまりまだダイナが現れていない年だ。でもティガは存在が確認されているしTV中継もされてた！確信を得るためにはこれしかない！)

隊員「さあ、存じ上げませんねえ。すいません。」

アスカ(は？ティガを知らない？……いや、たまたまこの人が知らなかっただけかも知れない！)

アスカ(他の人たちに聞いてみれば！)

アスカ「ちよつと用事を済ませてくる！」

アスカ(どんどん情報を集めていけばいつかは……)

それは他の隊員、街の人々、学生、子供にまで及んだ。

しかし皆、口を揃えて「知らない」というのだ。

アスカは隊員の所に戻った。

隊員「用事は終わりましたか？」

アスカ「ああ……」

……

！

アスカ「そうだ！5年前に世界が闇に包まれただろ!？」

隊員「ええーつと…なんて反応すればいいのやら…」
……
数秒の沈黙が生まれた。

隊員「すいません！この世界にそのような事実はありません！」
追い討ちを食らった気分だ。

護送用のヘリの中でアスカは最後の賭けに出た。

アスカ「そうだ！これを使えば…」

アスカは左腰に携帯してある超小型コンピューター「W・I・T・」
(ウィット)を取り出した

そして電波を取得して表示された情報は……

アスカ「なんだこれ…地球は地球でも…俺が生まれ育った地球
じゃない！」

形こそ同じだが全く違う歴史を歩んできた地球、ということだっ
た。

なるほど、話が噛み合わない筈だ

どんどん情報が出る。ネオフロンティア時代なんてものは存在し
ない。

ティガはもともといない。過去に巨大生物が暴れまわったことも
ない。

GUTSも結成されていない。正真正銘の言葉通りの平和な世界
だ。

……

アスカ「帰ってこれてなかったのか…」

アスカ「本当に別宇宙に飛ばされてしまったのか…」

アスカが落胆しているのも構わずにヘリは目的地へと進んで行く。

奇妙な生物に追跡されているとも知らずに・・・

B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
s

）
T
O

命懸けの入試

かれこれ2, 3時間は揺られてやっと目的地「IS学園」に到着した。

アスカはとてつもなく疲れていた。

大地を踏みしめアスカは呟いた

アスカ「・・・やったぜ」

何故 やったぜ なのかつて？

それはヘリの中での連中たちの蛮行から解放されたからだ。

ヘリの中で辞書以上に分厚い、必読と書かれた本を渡された。

参考書、らしいがページ数が尋常じゃない。それを覚えろと言うのだ。新手の拷問か。

それで最初は頑張ってはみたが、5ページ目でダウンした。

理解できない用語が多すぎる。とてつもなく苦痛だ。

それに外からは何者かに追われていた気もする。

「リラックスしてくれ」なんて言われたができるはずもない。

そんな蛮行から解放されたから「やったぜ」なのだ。

歩いていくと校舎らしきものが見えた。

第一印象は・・・でつけえ、だった。

自分の通っていた学校の敷地の十数倍は裕に超えるであろう大きさだった。

校舎の大きさに驚いていると・・・

？「貴様がアスカ・シンだな？」

すつげえキツそうな女性の声でした。

アスカ「ああ、そうだけど・・・」

振り返ってみると、姿は美しいが中に鬼が潜んでいるような女性が立っていた。

？「『そうだけど・・・』だと？」

アスカ「あ、なんかすいません」

怖え、すつげえ怖え。歳はそう差は無さそうだけど・・・

? 「まあいい。私は織斑 千冬、この学園の教師だ。」

アスカ「失礼だけど、年齢は……」

千冬「何故、今その話題が出る? …… 24だ」

あれ? 意外と話してくれる

アスカ「へー、ちなみに俺は22だ」

千冬「おい」

アスカ「はい!」

反射的に返事が出た。やっぱり怖すぎる。

千冬「さつきから気になっていたが、貴様は礼儀を知らんのか」

千冬「生徒は教師と話す時にはどんな相手だろうと敬語を使え、分かったか」

アスカ「はい! …… つてちよつと、生徒ってなんだ… なんですか?」

千冬「なんだ、聞いていないのか。貴様は生徒としてこの学園に保護されたのだ」

なんと、俺はまた高校生活を一からやり直すらしい。

アスカ「なんでですか?! 俺の学力が乏しいから高校からやり直させてことですか?」

千冬「それもあると思うが、一番の理由が『学園の関係者として働くよりも、生徒として在籍しているほうが安全だ』という意見がかなりあったからだと思う」

千冬「まあ、逆を言えば『男に教鞭を握らせたくない』とも言えるがな」

なんかショックだ。自分で質問しといてなんだがショックだ。

千冬「そう落ち込むな」

アスカ「そうだ、高校って入るのに試験が必要なんじゃ…」

千冬「そのことについてだが、「本人の合意を得て保護」という珍しいケースの場合、学科試験は免除される。よかったな。だが実技試験は必須なので今ここでしてもらおう。」

アスカ「え、ちよつと!」

千冬「時間が無い、始めるぞ!」

千冬が合図を出すとISを装着した人間が現れた。
アスカ（やっぱり女か… まあ当然か）
って冷静になってる場合じゃない！どうすればいいんだ！

———現在のアスカの装備———

【ガッツアーマー】耐熱、耐寒、耐圧性に優れたスーパーGUTSの隊員服。酸素ボンベ等の追加装備で宇宙服にもなる。

【W・I・T.】（ウィット）ベルトの左腰部分に装備してある超小型コンピュータ

【スーパーGUTSメット】デジタルビデオカメラや通信機が付いた特殊合金製戦闘用ヘルメット。特殊バイザーを付ければ宇宙でも活動できる。

【スーパーGUTSバックル】薬、爆弾、酸素ボンベ等が収納されているベルトのバックル。

【ガッツブラスター】スーパーGUTS隊員が携行する万能銃。引き金を引く時間を長くすることによってレーザーも撃てる。なかなかの威力。アタッチメントも付けられる等、用途多様。

【クエストアタッシュユ】この世界で初めて目が覚めた時に近くに転がっていた、スーパーGUTSの特殊装備が入っている大型トランク。以前使用していた物より大きい。おそらくアスカが乗っていた機体「ガッツイーグルαスペリオル」に積まれていた物だろう。

～中身～

【パラポレーザーパーツ】ガッツブラスターアタッチメントその1
レスキュー用のネットビームなどを撃てる。連射可能であり、ノーマル同様長押しすればより大きなネットを放てる。

【ナパームパーツ】ガッツブラスターアタッチメントその2 10mほどの怪獣ならば簡単に焼き尽くせるほどの威力を持った強力な焼夷弾を放つことが可能。連射は不可能だが、長押しでチャージが可能で、再度引き金を引くことで、より強い攻撃が可能。

【ブレイクシューター】強力なエネルギーの円盤型レーザーを連射す

るマシンガンタイプの、怪獣攻撃用大型光線銃。追尾レーザーも撃てる。

【ギヤラクシースナイパー】4、5発ほどの光弾を連射するライフル型銃器。威力はそこそこだが精密な狙いが可能で、相手の弱点を突くに特化している。

【XXバズーカ】(ダブルエックスバズーカ) 光弾を連射する折り畳み式大型レーザー砲。撃った時の反動が凄いが、それ以上の高い攻撃力を持つ。その威力はロボットの硬い装甲を破壊する。

【バリア素粒子発生装置】ポケットに入るくらい的小型装置で人体のプラズマ素粒子と同じ密度の素粒子を発生させて敵のレーザーなどを無力化する。連射や強い威力の攻撃を受け続けるとバリアが崩壊する。

【ネオプラスチック爆弾】敵への攻撃から畏、扉の爆破まで幅広く使える高性能爆弾。使用方法はプラスチック爆弾と同じ。

アスカ(あれ?勝てそうだぞ?)

試験官「よろしく願います」

アスカ「あ、こちらこそ」

アスカは礼儀として一礼をした。

千冬「用意はいいな!それでは開始!」

始めるの早くないですか、先生。

開始の合図と共に試験官が一直線に向かってきた。

しかも銃弾らしきものをばら撒きながら。

アスカ(どの武器で応戦しようかな... って速っ!)

アスカは間一髪で回避した。

試験官「ISの攻撃を目測で回避するとは、なかなかやりますね!」

試験官「でもこれならどうでしょう?」

今度は剣らしきものを生成して攻めてきた。

千冬「アシカ・シン、守ってばかりじゃそのうち殺されるぞ」

そうだよな、よし!

アスカはガッツブラスターを引き抜き

バギユウウン バギユウウン バギユウウン
相手の胸に三発、光弾を放った。
だが動きが一瞬止まった程度でダメージにはなっていない。
アスカはそう思っていた。

だが実際は違っていた。

試験官「シールドエネルギーが激減した!？」

そう、機能的な問題で停止しているのではない。

明らかに動揺して動きが止まっているのだ

アスカ「効いてるのか？よし！じゃあ一気に決めるぜ！」

アスカはクエストアタッシュからブレイクシユーターを取り出した

一方、試験官はというと

試験官「もう！ええええええええええい！」

無鉄砲にこちらに向かってきた。

だがアスカは冷静に

ブシユシユシユン

四発の光弾を放った。全弾命中。

その攻撃を食らったISは機能が完全に停止し、消滅した。

千冬「なんと、勝ってしまったか…。」

アスカ「よっしゃあああ！見たか、俺の超ファインプレー！」

お約束の言葉が思わず出た。

試験官「侮っていた訳ではありませんがまさか負けてしまうと
は…。」

アスカ「で、俺の合否は？」

試験官「文句なし、合格です。」

アスカ「ありがとうございます！」

どんな試験でも合格すれば喜ばしいものだ。

千冬「よし、終わったな。早速だが学生服に着替えてもらう。ついで来い」

アスカ「…はい」

この女は人が喜ぶ時間すら与えてくれんのか。

そして

アスカ「黒から一気に明るい色になったな」

何の話かって？ 服装の話だ。

俺が今まで着ていた黒を基調とした隊員服から、白い学生服になった。

そして何より驚いたのが若返っていることだ。

18歳くらいになってるんじゃないか？…… まあ時空を超えた影響としておこう。

にしてもこの制服、なんか生地が薄いような……

防御力は隊員服が10だとすると

10↓2 こんな感じだろう。大幅なダウンだ。

しかも白ってかなり目立つぞ？ 潜入とか夜襲とかに向かないんじゃないか？

と、考えはしたが今は俺がいた世界とは違う。何者かに襲われる訳でもないし、戦闘や囮捜査が行われるわけでもない。

そうだ、結果はどうであれ俺は今、平和な世界にいるんだ。

1年近く戦ってきた自分への休暇だと思っただけで高校ライフを楽しもうじゃないか。

よく見ればこの制服だっていいデザインをしている。

千冬「着替え終わったか？」

いきなりカーテンを開けられた。まあ着替え終わっていたから問題ないが。

千冬「ほう、なかなか似合うじゃないか。」

アスカ「そりやどうも」

千冬「もう敬語を忘れたか」

アスカ「そのことなんだけど、俺達実際2歳しか変わらないんだからさ、2人でいるときくらいタメ口を許してもらえないかな？」

千冬「……」

アスカ「駄目か……？」

千冬「本来そのようなことは許されていないが…… お前に身寄りがないというのも分かっている。特例だ。認めてやろう。」

アスカ「本当か!? ありがとう！」

でも調べるの早すぎじゃないですか? 別にいいけど

アスカはがっちり千冬の手を握った。

千冬「だ、だが過剰なボディタッチは控えろ」

アスカ「あ、すまん」

千冬はゴホンと咳払いをすると

千冬「入学式が始まる。移動するぞ」

千冬に促され移動するアスカ、その表情は期待と不安で満ちていた。

青春のリスタート

疲れたく

入学式なんて久しぶりだから妙に緊張したし、本当に女の子ばかりだし、ジロジロ見られるし、

寝ようものなら千冬に鉄槌を食らうし……本当に大丈夫かなあ……？俺の第2の高校生活……

1年1組の自分の机に突っ伏しながらアスカはこれからの生活に不安を覚えた。

今も視線を全方位から感じる。注目されるのは嫌いじゃないが、これは異常だ。

アスカは早く担任が来ることを願った。その願いが届いたのかドアが開く音がした。

？「はい、皆さん席について……ますね！」

妙に聞き覚えのある声でした。

気になって顔を上げてみた。

アスカ「あ……」

そこにいたのは、実技試験でアスカの相手をした試験官だった。

アスカ（あの人が担任かよ……なんか気まずいなあ）

？「はじめまして！私はこのクラスの副担任をやらせて頂く『山田真耶』です。」

副担任か、それならまだいいや。じゃあ担任は誰だ？

山田「1年間よろしくお願いしますね」

アスカ「よろしくお願いします……」

……っておい！何で俺以外誰も返事しないんだよ！

女の子ってこんなに消極的だっけ？

時代が変わったのか？それとも俺が古いのか。

山田「そ、それじゃあSHRをはじめます。」

山田「自己紹介を……それじゃあ出席番号順にお願いします。」

ああ…予想以上にきつい。大体、席の位置が最悪だ。なんだよ教室の中央&教卓の真ん前とかふざけてるのか？普通、入学当初は出席番号順に机を並べるものだろう？なんだよランダムって、完全に凶られたとしか思えない。アスカは窓に視線をやりどこまでも続く青空を見た。アスカ（あー、ボール投げてえー、キャッチボールがしてえー、欲を言えば野球がしてえー）

？」「…カ君！アスカ君！」

アスカ「は？…あ、はい！」

しまった、完全に意識が外に遊びに行ってしまった。

それに周りからはクスクスと笑われている。

そういう笑いは地味に傷つくから、どうせ笑うなら大声で笑ってもらったほうが清々しい。

山田「ご、ごめんね？出席番号2番目だからすぐに君の番なっちゃうんだよね？じ、自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

山田先生がこちらに何度もペコペコ頭を下げてお願いしてきた。女性の人に何度も頭を下げさせるのは酷なので咄嗟に起立した。

アスカ「そう何度も謝らないでくださいよ。自己紹介もしますから。落ち着いて」

山田「は、はい…すみません」

落ち着いてくれたのはいいが今度は顔が赤くなってしまった。

アスカ（なんで顔赤くなってんだ？）

自分の手を見るとガツチリと山田先生の肩を掴んでいた。

アスカ「あ！すみませんでした！」

山田「いえ…別に嫌だったわけでは…」

やつべえ…またやつちまったあ…

山田先生はブツブツ何か言ってるし…やつぱり無理かも。それにクラスメイトだ。俺が何かする度に反応する。勘弁してくれ。

山田「皆さん静かに！そ、それじゃ自己紹介お願いします…」
もう今までの醜態は自己紹介で挽回するしかないな。

今まで自己紹介をする時は必ず邪魔が入った。だがそれは準備が十分ではなかったせいだ。

しかし、今は違う。パムー　今は自己紹介の時間、しかも俺の時間だ。　パムー

スポーツ万能でしかも少しは賢いってことを教えてやる！　パムー

スウーーーーー (深呼吸)

アスカ「初めまして！俺はアスカ・シン「キャー！外から変な動物が入ってきたー！」

これだよ…わかってたよ…

変な声がしたもん。それで教室内はパニック、自己紹介どころじゃない。

…ん？…変な動物？…聞き覚えのある鳴き声…

まさか…

試しに「アイツ」の名前を呼んでみた。

アスカ「ハネジロー！」

教室は静まり返った。そして…

パムー

珍獣がこちらへ飛んできた。

アスカ「おお！やっぱり！久しぶりだなあ！元気だったか!？」

【ハネジロー】

アスカがスーパーGUTSにいた頃に、マスコットの存在として基地にいた。本名はファビラス星の神聖な動物「ムーキット」メラニー遊星に取り残されていたところをアスカに救助され、怪我の治療をしてもらった経緯からアスカに懐いている。小学2年生程度の知能を持ち、自身のホームページ「パムパムネット」を持つ。今でもたまに更新されている模様。

やった！ようやく知り合いに会えた！（人間ではないが）

それでも一緒に戦ってきた大事な仲間だ。素直にうれしい。

山田「ええと… お知り合いですか？」

アスカ「ああ！こいつはハネジロー、俺の友達だ！」

ハネジロー「パムー」

ハネジローの紹介が終わった瞬間、

「きやー…この子超可愛い！」「小さな牙がすっごいキュート！」「羽も小さくてかわいい！」「眼もまん丸で可愛いー！」「ハネジローちゃん！こっち向いてー！」「お願いアスカ君！この子触らせてー！」「いいな！わたしもさわりたい！」

俺は自己紹介がうまくいかない呪いでもかかってんのかな？ ハネジロー「パム〜？」

まあクラスのみんなは俺の名前を覚えてくれてたからよしとするか。

そんなことを考えていると…

バンツ！

アスカ「痛っ！」

なにかに叩かれた。そして上を見ると

邪神がいた。

アスカ「邪神!？」

千冬「意味が分からんことを言うな馬鹿者が」
ごもつとも

千冬「全く… お前は自己紹介くらいで騒ぎを起こすくらいの問題児なのか？」

アスカ「俺のせいじゃない！こいつが乱入したせいだ！」

ハネジロー「パムパム」

ハネジローを千冬の前に差し出した。

千冬「な、何だコイツは？」（可愛い／＼／＼）

アスカ「ハネジロー。俺の友達だ。」

ハネジロー「パムー！」

千冬「学園内に生き物を連れてくるな！」（触ってみたい…）

アスカ「だからコイツが勝手に入ってきたんだって！」

千冬「本当か？」（保護したい…）

アスカ「ああ！それでさ…コイツもここで保護してくれないかな…？」

千冬「しかしなあ…」（保護したい保護したい）

アスカ「頼む！なんなら抱いてみるか？」

千冬「ふむ／＼」（ふわふわして暖かくて可愛い／＼）

ハネジロー「パムム」

千冬「！」（鳴き声も可愛すぎる／＼）

アスカ「おゝ気にいったみたいだ！」

千冬「もういい！／＼返す！／＼」

アスカ「あれ？もういいんすか？」

千冬「ああ、それでだ…考えが変わった。他の教員達に掛け合ってみよう。」

アスカ「本当か!?ありがとう！意外と優しいんだな！」

ガンツ

千冬「敬語を使え馬鹿者目が」

最後が優しくない…

千冬の登場にクラスが大歓声を挙げたりしたが自己紹介タイムは無事(?)終わった。

それで今は休み時間なのだが他のクラスの生徒や他学年の先輩(と言っているのかよく分からない)が押し寄せてきて、心休まる時がない。

ハネジロー「パムム？」

こいつは我知らずみたいな顔してるし…

うだうだしていると授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「はい授業始めますよ」

山田先生の授業だ。

実はこのIS学園、コマ限界までIS関連教育を行うため入学式当日から授業がある。

新鮮な感じがするがこれはなかなかきつい。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で——」
授業が始まったのはいいが山田先生が何を言っているのか全く分からない。

教科書を見ても意味不明の単語の羅列にしか見えない。
もう苦痛だ。大体、俺は椅子に座っているより実践のほうが好きだ。

TPCの養成学校の頃からそうだ。

アスカ「ハネジロー……呑気に寝ていやがって……」

千冬の膝の上で寝息をたてるハネジローを軽く睨んだ。

そもそもなんであいつここに来られたんだ？

山田「アスカくん、何か分からないところがありますか？」

そんな俺の様子が気になったのか山田先生がわざわざ訊いてきてくれた。

ご名答、全然分からん。

山田「分からないことがあったらなんでも訊いて下さいね。なにせ私は先生ですから。」

自信満々に胸を張る山田先生。少し可愛かった。

でもなんか頼りになりそうな先生に見えてきた。よし。

アスカ「先生!!!」

山田「はい！アスカくん！」

やる気が溢れるような返事。さすが先生！

アスカ「全てが全くわかりません！」

二重表現で必死さが伝わるいい文章だと思う。

養成学校時代、これでだいたい教官は教えてくれた。

山田「え……？全てですか……？」

だが山田先生は明らかに困った顔で俺を見ていた。頼れる先生は旅行に出掛けたのかな？

山田「アスカくん以外で今の段階で分からない人はどれくらいいますか？」

挙手を促す山田先生。しかし誰も手を挙げない。

なんだよ！俺以外みんなわかってんのかよ！

そこへ千冬が俺の前に来た。

千冬「アスカ、入学前の参考書はどうした」

アスカ「参考書？」

ああーヘリの中での拷問の書か。確かに参考書と書いてあった気がする。

千冬「必読と記載してあった筈だが？」

… もう正直に話そう…

アスカ「入試の時に、流れ弾に当たって燃え尽きてました」

バンツ

千冬「馬鹿者、どうしようもないな」

また叩かれた。今日だけで何回叩かれたか分からない。

千冬「再発行してやるから一週間で覚えろ」

またやるが増えるのか…

やっと授業が一段落して気が抜けたからか凄く眠い。

そういえば、今日は一睡もしていなかった。

よし、少し寝るか…

そしてうとうとし始めた時に、

？「ちよつと、よろしくて？」

邪魔が入った。よろしい訳ねえだろ。やっと眠れると思ったのに。

でも、呼ばれたら対応するのが礼儀だ。

顔を上げて声の主を見た。

地毛の金髪が鮮やかな女の子だった。白人特有のブルーの瞳。そして世間からは間違いなく美人と評価される顔立ちをしていた。

アスカ「…」

？「聞いてます？お返事は？」

この子の高圧的な態度が鼻に付く。

アスカ「はあゝ…聞いてるよ…」

？「まあ！なんですの、そのやる気のないお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なことなのですからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

アスカ「…」

こいつ面倒くせえええ！

俺はこういう奴は大嫌いだ。でもクラスメイトなんだし、歩み寄ってみるか。

そーいやこいつの名前知らないな…

アスカ「ごめん。俺、君の名前知らないんだけど…」

自己紹介の時の記憶は叩かれたショックが強すぎて忘れてしまった。

？「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

名前セシリアっていうのか。へー。

アスカ「質問いいかな？」

セシリア「下々の者の要求に応えるのも貴族の務め。よろしくですよ。」

一々鼻につくな。

アスカ「代表候補生って、何？」

がたたつ、と聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっとこけた。俺、変なこと聞いたかな？

セシリア「あ、あ、あ…」

アスカ「『あ』？」

セシリアあなた本気でおっしゃっていますの!？」

アスカ「おう！知らないな！」

知らないことは素直に言おう。アスカとの約束だぜ？b

セシリアは怒りが一周して逆になったのか、こめかみを押さえながらぶつぶつ言い出した。

セシリア「信じられませんわ。極東の島というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら…」

おい、それは俺以外の人に失礼だろ！

「で、代表候補生って？」

セシリア「国家代表 I S 操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。単語から想像したらわかるでしょう」

アスカ「たしかにそれっぽいな」

「そう！エリートなのですわ！」

びっくりした！急に復活したな…

セシリア「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

アスカ「そっかー。それはラッキーだ」

セシリア「… 馬鹿にしていますの？」

幸運だつて言ったのは誰だったっけ？

セシリア「大体、あなた I S どころか世の中のことも知らないのに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男で I S を操縦できる者が現れたとニュースで見ましたから、さぞかし素敵な方だと思っっていましたけど、期待はずれですわね」

アスカ「俺に何かを期待されても困るんだけど… あ！速いストレートの投げ方教えようか？」

セシリア「結構ですわ」

即答しないでくれよ…

セシリア「ふん、まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

これが優しさですか… ちゃダビン星人が聞いたらショックで死ぬぞ。

セシリア「I S のことでわからないことがあれば、泣いて頼まれたら教えて差し上げてよくつてよ。何せわたくし、入試で “唯一” 教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、をものすごく強調しやがって… って、ん？

アスカ「入試って、その… I S を動かして戦うやつか？」

セシリア「それ以外になにがある？」

アスカ「俺も倒したぜ、教官。生身で」

これだけ罵られても我慢したんだ。今からは俺のターンだ。

セシリア「は……？？じよ、冗談ですわよね……？」

アスカ「いや、本当だつて……」

セシリア「証拠がありませんわ！」

アスカ「何なら証拠見せようか……？ ハネジロー」

俺の呼びかけに反応して、一緒に寝ていたハネジローが起きた。

実はこのハネジロー、見たものを映像として映す能力があるのだ。

ずっと俺のことは見ていたなら試験の時だつて見ていただろう。

アスカ「ハネジロー、今日の試験の様子を映してくれ。」

ハネジロー「パムー」ビィツーー

ハネジローの眼から発射された光線で、空間に映像が現れた。

セシリアは映像の内容を見て呆然としている。

セシリア「ありえませんか…… ISを目測で避けるなんて、ISに

正確に銃弾を当てるなんて…… しかも生身の人間が……」

普通じゃないからな、俺。

セシリア「教官を倒したのはわたくしだけだと聞きましたか？」

アスカ「それって女子ではってオチじゃないのか？それに俺は急遽

試験をしたんだから情報が行き渡ってなかったのかもな、たぶん」

精一杯のフォオローも忘れない。

セシリア「たぶん!? たぶんってどういう意味かしら!？」

アスカ「落ち着けよ……」

セシリア「これが落ち着いて

キーンコーンカーンコーン

話に割って入った三時間目のチャイムで俺は救われたような気がした。

セシリア「またあとで来ますわ！逃げないことね！」

逃げねえよ

千冬「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

この時間は山田先生ではなく千冬が教壇に立っている。

千冬「と、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ん？なんだ？クラス代表戦に、代表者って

千冬「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席、いわばクラス長だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

千冬の説明を聞いても全くわからん。まあクラス長っていうくらいだから面倒な仕事が多いんだろう。なる奴はご苦労様だな。

「はいっ。アスカくんを推薦します！」ん？「私もそれがいいと思いません！」は？

千冬「では候補者はアスカ・シン……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

アスカ「おい待てよ、俺はそんなのやらないぞ！」

千冬「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

アスカ「でもさあ……」

まだ反論を続けようとした俺を、当然甲高い声が遮った。

セシリア「待ってください！納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリアさんだ。人とは仲良くしておくものだな。

セシリア「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

そうだ！もつと言ってやれ！……っておい……

セシリア「実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

あれ？俺は人でもなくなっただぞ

セシリア「いいですか!?クラス代表は実力トップがなるべき、そし

てそれはわたくしですわ!」

おいおい・・・友達なくすぞ・・・いるかどうかも分からんが。

セシリア「大体文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で——」

カチン。イラツときた。

アスカ「イギリスだつて同じようなもんだろ。偉そうにしてるくせにいざ戦闘となれば俺達に任せっきりだし、全然頼りにならねえしデスフェイサーの時だつて……………」

……………あ

セシリア「なつ……………!?!」

やつべえ……………つい口が滑つた……………」

TPCのイギリス支部の軍曹の太つたおっさんの態度が妙にでかくて気に入らなかつたのを思い出し、つい言ってしまった。この世界のイギリスさんはどうか分からんが。

セシリアを見たら案の定顔を真つ赤にして怒りを示していた。

セシリア「あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの?!」

最初に侮辱発言をしたやつがよく言うな……………」

セシリア「決闘ですわ!」

アスカ「望むところだ! 話し合うよりわかりやすい!」

セシリア「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ奴隷にしますわよ」

アスカ「馬鹿にするな。真剣勝負で手を抜くほど腐ってないぜ」

セシリア「そう? 何にせよ丁度いいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね!」

でもどうしようか、男が本気で、しかも年下の女の子と力比べをするわけにもいかない。

どうしよう……………」

アスカ「そうだ! ハンデはどのくらいつける?」

セシリア「あら、早速お願いかしら？」

アスカ「いや、俺がどのくらいハンデつけたらフェアになるのかなーって」

その瞬間クラスから大爆笑が起こった。

割と真面目に言ったのにな……

「アスカくん、それ本気で言ってるの？」「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」「アスカくんはISを使えるかもしれないけど、言いすぎよ」「もし男女差別で戦争が起きたら男性陣は三日も持たないって言われてるほどだよ？」

みんな本気で笑っている。俺を馬鹿にしているような笑い方だ。

彼女達に悪気はないことは俺もわかっている。でも、感情が抑えられなかった。

アスカ「そこまで言うなら証明してやるよ！」バンツ！

机をぶっ叩く。そして教室内に静寂が生まれた。

アスカ「ハンデなんてなくても、男でもコイツを倒せるってことを！」

セシリア「本当に馬鹿ですわね、奴隷の練習でもしているがいいですわ」

千冬「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。アスカとオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

アスカ（あの馬鹿でかい天狗鼻、俺がへし折ってやるー！）

午前中の授業が終了し、昼休みに突入した。

俺はとにかく一人になってトレーニングメニューを考えることにした。

でも、どうやって攻略すればいいんだ？ 相手の力は未知数だ。

ハネジローに偵察に行ってもらって、資料をゲットすると言う手もあるがそれはルール違反だ。

だから協力者が欲しい。
多分一人もいないと思うけど。

そうこうしてる間に目的地に着いた。

俺が目指していた場所はこの校舎の屋上だ。

一人になるにはうってつけの場所で、中学、高校生の頃はよくここで悩んだものだ。

幼いころの出来事を思い出しながら扉を開けた。

アスカ（先客ありか……）

ん？あの人同じクラスの……名前何だっけ？

でもチャンスだ。少なくとも俺よりもISの知識はあるだろう。

これはもう協力してくれるか聞くしかないな。

アスカ「あー」

？「うわっ！なんだ貴様！」

アスカ「あ、ごめんな。えっーと名前なんだっけ？」

？「私は 篠ノ之箒 だ……ってお前は……」

アスカ「ああ、アスカ・シンだよ」

箒「やはりか……無謀な戦いを挑んだ者としてもう校内中の噂だぞ」

アスカ「マジで？」

箒「はあく……なんで無謀な戦いを挑んだ？」

アスカ「その言い方は気に入らないな」

箒「は？」

アスカ「俺は無謀だなんて微塵も思っちゃいないぜ。そんなの最初から負けを認めるようなものだからな」

箒「ほう」

アスカ「それに負けず嫌いなんだよ。『絶対に勝ってやる！』っていう気持ちが空回りもするんだけど」

箒「お前、馬鹿だろ？」

アスカ「馬鹿じゃねえ！単純なだけだ！」

箒「で、私に何か用があるんじゃないのか？」

アスカ「そうだ！ISについて教えてくれ！」
箒「なんで私なんだ？」

アスカ「理由なんてない。そこにいたからだ」
.....

箒「フフフ、やっぱりお前は馬鹿だな。でも気に入った。」

アスカ「じゃあ教えてくれるんだな!？」

箒「私でよければな」

アスカ「もちろんだよ！よろしく！」

やったぜ！協力者がいてくれるだけで大分心強い。仲間の大切さを今改めて実感した。

放課後、学園内道場にて……

箒「ていつ！」 シュン！

アスカ「うおっ！ 危ねえな！」

道着に着替えるなり、いきなり箒が木刀を振り回してきた。

箒「逃げるな！」

アスカ「普通逃げるわ！大体ISの練習じゃないのかよ」

箒「まずお前は基礎体力をつけろ。そんなんじやISなんて使いこなせないぞ」

アスカ「んなこと言っても……」

あの木刀は当たったっちゃいけない気がする。俺の中の光がそう言ってる。てかギャラリーがうるさい。

「アスカ君て…… まさか弱い？」 「やっぱり男の子って勝てないんだよ」 「そうなのかな」

やべえ。このままじゃ弱い奴のレッテルを貼られたまま学園生活を送らなければいけない。

アスカ「ああもうやけだ！かかってこいー！」

箒「それでこそ男だな！」

とは言ったものの箒の太刀を素手で受け流すのは辛すぎる。一気

に勝負つけるか。

アスカ「スッ

箒「隙あり！」ビュン！

アスカ「うしっ！読み成功！」バシッイ！

箒「白刃取りだど!?!」

箒の手から木刀を離させることに成功した。

アスカ「そして！TPC養成所で生み出した俺の技！アスカスパーデラックス投げ（ただの巴投げ）！」

今思ったがこの名前はダサイと思う。改名するか。

箒「くっ」ドシン！

アスカ「おぉー綺麗に決まったなー！」

箒「負けた……だが素晴らしい勝負だった」

いつの間にか勝負になっていたが、そこは気にしないでおこう。

箒「あの一連の動作、相当の訓練を受けていないと身につかないものだ」

アスカ「いやいや、箒もすごいぜ」

それから1週間、毎日練習を重ねた。しかしISの練習は全くしていない。

勝てるのかな……

荒鷲根性《ガッツイーグル》!

試合当日の昼、千冬にこんなことを言われた。

千冬「アスカお前宛に専用機が届いている」

アスカ「は？」

千冬「わからんか？お前専用のISだ」

なんでそんなものが俺に届くんのだ？

俺が考えていると教室がざわめいた。

「専用機!?一年のこの時期に!」「つまりそれって政府からの支援が出るってことで:」「いいなく私も早く専用機欲しいなあ」

そんなに羨ましいのか:」

でも本当になんで俺宛に？

それを見かねた千冬が口を開いた。

千冬「本来IS専用機は国家あるいは企業に属する人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況だ。よってデータ収集を目的として専用機が用意されたんだ」

アスカ「なるほど」

整理してみた。

今まで集めた情報によると

1. ISは世界に467機しか存在しない。
2. コアは篠ノ之博士しか作れない。そして博士はコアをもう作っていない。

3. 俺が特別待遇。そして実験体。

よし分かった。あれ？篠ノ之って:」

千冬「勘付いたか。そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

やはりか。でも筈は家族の話をしたがらないし、俺が家族の話も振っても話を逸らす。何か闇がありそうだな。

く放課後く

いよいよ決戦のときだ。

だがその前に俺の専用機とやらを受け取らないといけないので、第三アリーナのAピットに足を運んだ。

しかし俺のISは無かった。そもそも俺を呼んだ山田先生が来ていない。何してるんだ…？

山田「アスカくんアスカくん」

などと考えていると、山田先生が今にも転びそうな足取りでこちらへ来た。

アスカ「落ち着いてくださいよ…深呼吸、深呼吸。はい、吸ってー」

山田「すくすくすく…」

アスカ「はい、そこでストップ！」

山田「うっ…」

ノリで言ってみたら本気で止めた。冗談通じないのかな？

アスカ（どの辺まで持つのかな？）

山田「…ぶはあっ！い、いつまで止めていれば…？」

おっとついつい遊んでしまった。

千冬「目上の人間には敬意を払え」

アスカ「うえ！いたのかよ…」

バンツ

アスカ「痛ッ！」

畜生…何回、人の頭叩けば気が済むんだよ

山田「で、それでですねっ！ようやく来ましたよ！アスカくん専用のIS！」

え？

千冬「アスカ、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

おい？

「早くー」

山田先生、千冬、箒の声が重なる。

せつかちだなあ

ゴゴンツ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。

その扉の奥に俺のISがあった。

アスカ「これが…俺の…」

山田「はい！アスカくん専用のISです！名前がまだないので付けてあげて下さい！」

アスカ「名前……」

このIS……ガッツイーグルにそっくりだ。

アスカ「よし、『ガッツイーグル』だ」

千冬「ガッツイーグル、か。お前にしてはなかなかいい名前をつけるじゃないか」

箒「決めた理由とかはあるのか？」

アスカ「いや……別に……」

理由なんてない。必要ないんだ、俺達には。

千冬「装着してみろ」

俺はIS……ガッツイーグルに触れる。

アスカ「……きた！」

あの感覚だ。はじめてISに遭遇したときの不思議な感覚。

千冬「背中を預けるようにしろ。座る感じでいい。あとはシステムが最適化する」

千冬の言葉通り、身体を受け止められるような感覚がして、俺の体に合わせて装甲が閉じた。

ガッツイーグルの装甲は白が基調となっており、頭の装甲にはα号、腕部分はβ号、脚部分はγ号がモチーフになっている。

アスカ「よし、いける」

千冬「そうか、では行け」

ハネジロー「パムー！」

アスカ「ありがとう、ハネジロー。行ってくるぜ」
箒「アスカ」

アスカ「なんだ？」

箒「どうせやるなら勝ってこい」

アスカ「もちろんそのつもりさ」

決心を固めたと同時にゲートが開いた。
すうすうすう

アスカ「よっしやあ！いくぜ！」

セシリア「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らし、腰に手を当てている。

だが俺の関心はそんなところにはない。ハイパーセンサーは感知しない。

鮮やかな青色の機体『ブルーティアーズ』。その外見は特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、王国騎士のような気高さを感じさせる。

セシリアの手には2mを超す巨大な銃器《スターライトmkⅢ》が握られていた。

アリーナスステージの直径は200m。発射から目的到達までの予測時間は0.3秒。既に試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃つてきてもおかしくない。

セシリア「最後のチャンスをおあげますわ。お馬鹿さん」

だれが馬鹿だこの野郎

アスカ「チャンス？」

セシリア「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

アスカ「答えはNだ。それはチャンスじゃない、一方的な交渉だ」

セシリア「交渉決裂ですわね。それなら——」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

セシリア「お別れですわね！」

閃光が俺の体を撃ち抜いた。

アスカ「うおっ！」

オートガードが俺を守ってくれたが、成形が間にあわなかった左腕の装甲が一撃で吹っ飛んだ。

アスカ(ガッツイーグル、俺に応えてくれ！)

セシリア「さあ踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テイアーズの奏でる円舞曲《ワルツ》で！」

セシリアの繰り出す雨のような攻撃を避けるのが精一杯だ。

でも、やらなきゃやられる！

アスカ「装備を！」

すぐさま装備可能な武器の一覧を開いたが……

ピンポイントショット 以上

アスカ「使えるのが銃器一個だけかよ！」

まあ…… 攻撃しないよりは断然いい。

俺はピンポイントショットを握りしめた。

セシリア「そんな銃一つだけで挑もうだなんて…… 本当に大馬鹿で

すわね！」

なんとでも言えればいいさ

アスカ「根性！根性！ど根性！」

セシリア「暑苦しいですわね」

アスカ「おりゃああ!!」

……

セシリア「約三十分。よく持ちましたわね。褒めて差し上げますわ。

アスカ「そりやどうも…… ハアハア」

セシリア「このブルー・テイアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

セシリア「ですが、もう終わりですわ！」

セシリアの命令を受けたビットが二機多角的な直線起動で接近してくる。

アスカ「クソッ！」

セシリア「左腕、いただきますわ！」

まずい！装甲が大破しているそこに攻撃を食らえば、致命傷だ。そ

うなったら確実に俺の負けだ。

ならこうだ！

アスカ「どりやああああ！」

ガギンツ！

俺はセシリアのライフル銃身を装甲が生きている右手でぶん殴った。

その衝撃で砲口がずれて、とどめの一撃を免れる。

セシリア「無茶苦茶しますわね！けれど無駄な足掻き！」

セシリアは距離を取り、空いている左手を横に振る。

よし！ 今だ！

交差するレーザーをくぐり抜け、0距離射撃を次々とビットに食らわせた。

その攻撃を食らったビットは爆散した。

セシリア「なっ……！」

アスカ「セシリア、この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かないな？」

セシリア「……」

アスカ「そして、その時はお前はそれ以外の攻撃ができない。制御に意識を集中させてるからな」

セシリアの目尻が引きつった。凶星か。

俺が撃墜したのは三機。残り一機で俺の一番反応が遅い角度を狙ってくる。

キユインツ！

来た！ライフルの砲口は間に合わない。

俺はビットの攻撃を避けセシリアの懐に飛び込む。

セシリア「……かかりましたわ」

にやりとセシリアが笑った。

まずい！

本能的に危険を感じて距離を置いたが間に合わず……

セシリア「ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

ミサイルをぶちこまれた。俺は負けを覚悟した。

—— アスカ、フォーマットとフィッティングが終了した。
確認ボタンを押してくれ

(誰の声だ…?)

—— 私だ、ガッツイーグルだ

(なんで喋れるんだ?)

—— 君の強い意志が私に【感情】を与えてくれた

(そんなことってありえるのか?)

—— 現にこうして起こっているんだからなあ……

—— それかウルトラマンの力に共鳴したのか

(俺のことは知ってるのか?)

—— 君のことは何でも知っているさ。私と君は一心同体

みたいなものだからな

(そういうもんか)

—— そんなことよりもアスカ、このまま終わっていいのか

?

(いいわけねえだろ!)

—— だろう? 私も同感だ。だから、

(だから?)

—— 暴れてやろうじゃないか! 荒鷲の如く!

(ああ、行くか! 荒鷲根性見せてやろうぜ!)

セシリア「あっけないですわね」

その時、セシリアは勝ち誇っていた。だが、一瞬にして顔が凍りつ
いた。

セシリア(嘘…? 確実に仕留めた筈…)

セシリア「まさか…： 一次移行《ファースト・シフト》!？」
俺のISがよりガッツイーグルに近い形へと変化した。

セシリア「あなた…： まさか今まで初期設定だけの機体で戦っていたと言うの!？」

なるほど、初期化と最適化とはこのことか。やつと理解できた。

アスカ「これでやつと俺専用のISになったのか?」

—— そうだ。これからよろしく頼むぞ! ——

アスカ「こちらこそよろしくな!」

アスカ「本当の戦いは…： ここからだぜ!セシリア!」

セシリア「望むところですわ!」

—— 行くぞ!アスカ! ——

アスカ「ちなみに俺の武器は?」

—— それがちよつと特殊なんだ。君の所持している超小型コンピューター、W. I. T. のデータを基に武器を生成する。 ——

アスカ「それつてつまり、TPCのメカニクや、俺達が戦ってきた敵の武器が使えるってことか?」

—— まあそんな感じだ。とにかく一回やってみてくれ。物は

は試しだ。 ——

よし、記念すべき最初の武器はこいつだ!

—— レイクュバス・スキャン! ——

ガキングキーン!

俺は右腕にレイキュバスの巨大な鋏を模した武器を生成した。

セシリア「それが何になりますの!」

俺めがけてビットが放たれる。だが俺はそれを握り潰した。

グシューウ!!

セシリア「な…：!」

すげえ…： すげえよ俺のIS!すげえよガッツイーグル!

セシリア「隙あり!」

しまった!一瞬の隙を突かれた!

—— 問題ない! ——

そう言うのとガッツイーグルは自動でスキャンを開始した。

—— ガギ・スキャン! ——

その瞬間レイキュバス装備が粒子化し、代わりに頭に一本角が生成された。

これって確か…:

アスカ「バリヤー光線!」

角から放たれた光線が俺を包み込み、セシリアの攻撃を防いだ。

アスカ(危ねえ!): テイガが戦った怪獣の知識があつてよかつた…。いきなりスキャンするのはちよつと困るな…)

—— すまない、これからは君の判断に任せよう ——

アスカ(自動操作は本当にピンチの時だけにしてくれよ)

—— わかつた。そうさせてもらう ——

セシリア「今度はバリアを…:?」

確実に動揺している。今だ!

アスカ「セシリア! 覚悟!」

—— メカニック・スキャン! ガッツイーグル! ——

右手にガッツイーグルを模した銃を成型した。

セシリア「なっ!」

—— α 砲・ β 砲・ γ 砲、直結完了! ——

アスカ「食らえ! トルネードサンダーアアアアアア!」

ギリユウウウウウ…: ドガアアアアアアアア

セシリア「わたしが…: 負ける…:?」

アスカの攻撃を食らったセシリアはそのまま崩れ落ちていった。

ISの装備も解けてしまった。そのまま地面に真つ逆さまに落ちる。そして自分の人生は終わる。

そう思っていたセシリアであった。

アスカ「危ない!」

ポスツ

だが実際に背中に伝わったのは硬い地面の衝撃ではなかった。優しく、全てを受け止めてくれそうな…。そんな手の感触だった。

アスカ「間一髪だったな！」

セシリア「へ!?あの、その……」

アスカ「怪我は……ないよな？」

セシリア「は、はい……」

『試合終了。勝者——アスカ・シン』

試合終了のアナウンスがアスカの勝利を伝えた。

アスカ「やった！俺の勝ちだ！」

セシリア「そのようですわね……！」

セシリアは悔しくてしようがなかった。自分が見下していた者に負けたのだ。

セシリア（もう、とことん笑うがいいですわ……）

だがアスカは笑うようなことはしなかった。

アスカ「でもいい試合だった！色々学ばせてもらったし、すげえなやっぱり！代表候補生って！」

セシリア「……」

アスカ「あと……ごめん！」

セシリア「え……？」

アスカ「お前の国を馬鹿にするようなこと言って。どんなことであれ自分の国を馬鹿にされたらいい気分はしないよな……本当にごめん！」

驚いた。なんとこの男、勝利したにもかかわらず謝ってきたのだ。しかも深々と頭を下げて。

セシリア「え？、いや……その……」

それに比べて自分はどうか。謝るための一言がどうしても出せなかった。

完敗だ。今なら負けた理由がなんとなくわかる。

セシリア「わ、わたくしにも、少々非がありましたわ」

セシリア「こ、この件はこ、今回の試合で白紙にしてさしあげます」

アスカ「本当か?!ありがとう!改めて一年間よろしくな!セシリア!
!」
セシリア「!こ、こちらこそ...」
セシリア・オルコットがアスカ・シンに強い憧れを持った瞬間だった。

〽翌日〽

セシリア「おはようございます、アスカさん」

アスカ「へ?...俺のこと...言ってんの...?」

セシリア「おかしいでしょうか...?」

—— アスカ!女の子を不安にさせるんじゃないぞ? ——

アスカ(わかってるよ)

ちなみにガッツイーグルは普段は腕輪になって俺の手首に納まっている。

アスカ「いや、別におかしくねえよ。素直になったみたいだな」

—— おい!一言余計だぞ! ——

アスカ(一言一言突っかかってくるなよ)

セシリア「素直...?...ふふつ、誰かのおかげで、そうなれたのかもかもしれませんわね」

アスカ「?」

そう言う上機嫌で自分の席に行くセシリア。

—— うゝむ、高校生の女の子というものはよくわからないいなあ ——

アスカ(だよなー俺もわからねえ)

ハネジロー「パム...?...?」

アスカ「お前もわからないか」

.....また謎が増えたな

二時限目、実践授業ということで、だだっ広いグラウンドに集められた。

みんな（俺以外）ISスーツという水着みたいにピッチリとしたものを着用している。

千冬「全員揃ったな。．．．ん？おいアスカ！何故ISスーツを着ていない？」

やっぱり言われたよ、鬼教官に。

アスカ「何故ってそんなのもともと、持ってませんよ」

千冬「何？なら事前に伝えておけ、馬鹿者」

さつきまで存在自体知らなかったんですが。

アスカ「すいません」

．．．．．

アスカ「あ！そうだ、ガッツアーマーで代用できませんか？」

千冬「ガッツアーマー？．．．ああ、お前が試験の時に着ていたあれか」

アスカ「はい！あれなら機動性にも防御性にも優れていますから」

千冬「．．．今日のところはそれでやれ。問題がなければ次回からも着用を認める」

アスカ「ありがとうございます！」

千冬「授業が始まるまであと五分だ。それまでに着替えてここに来い」

アスカ「ラジャー！」

と言いながらダッシュで更衣室へ向かった。

そして一分半後．．．．．

アスカ「おまたせ．．．しました！」ハアハア

息切れぎみの声で千冬に時間内に戻ってきたことを伝える

「「「早っー」」」

女子全員がアスカの着替えの早さに、驚いて声を出さずにはいられなかつた。

千冬「お、おう。早かったな（色々な意味で）」

アスカ「当たり前前でしょ！元野球部の体力を舐めないでください！」

千冬「私はお前の馬鹿体力は野球部と関係ないと思うがな」
ちなみにこのガッツアーマー、従来のツナギ式ではなくセプレートタイプのスーツだ。

千冬「よし、これで始められるな」

千冬「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。アスカ、オルオット。試しに飛んで見せろ」

アスカ（こい！ガッツイーグル！）

瞬間、俺の身体を光の粒子が包み込み体が宙に浮く。

瞬きをするとISを装備した状態で地面から十数cm浮遊していた。

同じくセシリアもIS『ブルー・ティアーズ』装備して浮かんでいる。

先日の俺との対戦で、大きな損傷を被ったその機体は完全に修復が終わっていた。

千冬「よし、飛べ」

セシリアの行動は早かった。急上昇し、遥か頭上で静止した。

俺も飛べるのかな……

あの時はノリと根性で飛んでいたもんだから不安しかない。

—— 自分を信じるんだ、アスカ ——

アスカ（よし！俺は飛べる！俺は飛べる！）

—— ほら見ろアスカ！飛べたじゃないか！ ——

アスカ「おおお！俺、飛べてる！科学技術の進歩スゲー！」

あつという間にセシリアに追いついた。

セシリア「速いですわね」

アスカ「いいアドバイザーがいるからな」

セシリア「それならわたくしにもご指導していただきたいですわ」

アスカ「残念だけど俺専用みたいなんだ」

セシリア「そう、残念ですわ。ふふっ」

確かに地上にものすごい速さで着いた。だが世間一般はこれを墜落と言うらしい。

クラスメイトのくすくす笑いが地味にダメージを受ける。

千冬「馬鹿者、誰が地上に激突しろといった」

アスカ「すいません…」

箒「情けないな…アスカ。教えてやったとおりにやれば、こんなことにはならなかったのに」

『ぐっ、とやって、どんっ、となつて、ずがーん、という具合だ』という解説不可能な説明で、できたなら苦労はしない。

箒「大体お前は、寮の中で何回馬鹿を——」

まくたお説教ですかい。

だがそれを遮るように、俺の前に影が現れた。

セシリア「大丈夫ですか、アスカさん！お怪我はなくて？」

アスカ「ああ、大丈夫だ」

セシリア「そう。それは何よりですわ」

うふふと、また楽しそうに笑うセシリア。何が彼女をここまで変えたのだろうか？

箒「ISを装備していて怪我などするわけがないだろう…」

セシリア「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識ですわよ？」

箒「お前が言うか。この猫かぶりめ」

セシリア「鬼の皮をかぶっているよりましですわ」

うわあ…女同士の争いって怖い…

——アスカ、私も怖い。仲間だ。——

千冬「おい馬鹿者ども、邪魔だ、端っこでやってろ」

二人の頭を押しつけ、千冬が俺の前に立つ。

千冬「アスカ、武装を展開しろ。使いやすい武器を選考してな」

アスカ「使いやすいの…」

千冬「おい、返事はどうした」

アスカ「はい！」

千冬「よし、でははじめろ」

アスカ（使いやすいのって…：…なんだ…：…？）

——— まあ、私が適当に選ぼう

アスカ（ああ、頼む）

——— ギガンテス・スキャン！

左腕に超怪力の猿人の拳を模した武器が装備される。

用意された岩の塊を一発のパンチで粉々にしてみせた。

まあ…：… 使いやすいつちや使いやすいか。

「おお〜」

みんなの反応はまずまずといったところか。

——— なかなかいいだろう？次はこれだ！

——— レイクュバス・スキャン

アスカ（これは前にも使ったな）

——— 甘いな。君はレイキュバスの特徴を生かしきれて

いない。

アスカ（特徴…：… あ！熱攻撃と冷凍攻撃の使い分けか！）

——— ご名答！だが私はそのレイキュバスの上に行く！

——— なんか今日は妙にテンションが高いな…：…

アスカ（まあ使ってみるか…：…）

レイキュバスアームで用意されたマネキン（いつ用意したんだ…：…）を力一杯掴んだ。

千冬「ちなみにこのマネキンは非常に硬い素材で作られている。容易に碎けると思うな」

なるほど確かにちよつとやさつとじゃ碎けないな。

——— コールドガス！

ガッツイーグルが叫んだ瞬間、鋏からマネキンめがけてガスが吹き出た。

アスカ（おお！）

ガスを浴びたマネキンはみるみる凍ってゆく。

バキッ

そしてバラバラに砕け散った。

アスカ「それからの……」

—— フレイムハンマー! ——

鍔が炎を纏った。

アスカ「うおりやあああ!」

もう一体のマネキンに叩きつけると、バラバラに焼き焦げてしまった。

すっげえ………

「うわーすごいー!」「かつこいいー!」「他のはないー?」

セシリア「アスカさん、わたくしにも見せてください!」

代表候補生が興味を持つてゐるって凄いことなんじゃないか?

アスカ(ガッツイーグル、次で最後だ)

—— OK、最後はGUTSの兵器でいこう。 ——

—— メカニック・スキャン!ガッツウイング! ——

ガッツウイング1、2号を掛け合わせたような形状のライフルが現れた。

ブシュン ブシュン ブシュン ブシュン

そして残りの鋼鉄板全てに風穴を空けた。

アスカ(やっぱりスパル砲って使えるよな)

千冬「よし、いいだろう」

アスカ「終わりですか?」

千冬「これ以上グラウンドを荒らされるのは困るからな」

確かに穴ぼこだらけだ。

ISを解除しようとしたその時、

ドゴオオオオオン!ドガガガガアアアン!ドゲシャアアアン!

「ぎやあああああ!」「何!」「何が起きたの!?!」

突然の空爆音にクラスメイトたちの悲鳴があがる

アスカ「なんだ!?!」

千冬「何事だ!」

俺と千冬は空を見た。

アスカ「!……」

空を見ると信じられないものがいた。

アスカ「嘘…… だろ……？」

空爆の犯人は、俺とスーパーGUTSを引き裂いた憎き宿敵、
…… スファイアだった。

「ヒカリ、キエロ！」

そう言いながら破壊活動が続ける。

千冬「……………」

呆然とする千冬。 まずい！このままじゃみんなが死ぬ！

アスカ「みんな！安全な場所に避難するんだ！織斑先生も早く！」

千冬「！…… ああ、すまない。少し混乱していた」

アスカ「いいから早く！校舎の方へ逃げて！」

千冬を生徒と共に避難するように促す。

千冬「待て、お前は どうするんだ」

アスカ「俺はあいつらと戦います！」

千冬「待て、アスカ！お前ひとりでは何ができる！」

アスカ「俺のことはいいから！それに一人じゃない！」

ガッツイーグルという心強い友ができたのだから。

千冬「くっ……」

アスカ「早くあの子たちの元に行ってくれ！このままじゃ戦えない
！」

千冬「…………… 馬鹿」

そう言うと千冬は生徒が避難する校舎へ走り出した。

それを追うスファイア。

アスカ「待ちやがれ！お前らの目当ては俺だろ！」

ガッツイーグルを飛ばし、スファイアに向かってレーザーを撃つ。

バアアアン

一体撃破。

レーザー数発で倒せるが、数が多すぎる。 あっというまに囲まれて
しまった。

アスカ「畜生！こうなったら！」

アスカ「ガッツイーグル！地上に降ろしてくれ！」

—— アスカ、とうとう【アレ】になるのか ——

アスカ「ああ… みんなを守るためにな」

—— なら、援護は任せろ！ ——

アスカ「せーの、はい！」

ガッツイーグルが俺の身体から離れる。そして

—— フェザーモード！ ——

戦闘機の形になった。

アスカ「頼んだぞ！」

—— 了解！ ——

アスカ「絶対に… 光は消えることない！」

ポケットからリーフラッシュャーを出す。

そしてそれを頭上へ挙げる。瞬間、リーフラッシュャーから光が溢れ出す。

アスカ「ダイナアアアアアアアア！」

千冬（あの馬鹿、大丈夫なのか？）

千冬は生徒を避難場所に誘導しながら、そればかり考えていた。

箒「アスカは戦っているのか？」

セシリア「無事だといいいのですが…」

箒、セシリアも同じ事を考えていた。

その時、グラウンドの周辺が眩い光に包まれた。

セシリア「なに？… あの光…」

箒「とてつもない何かを… 感じる…」

千冬「光の… 巨人…？」

光の中に立っていたのは50mを越す光の巨人だった。

変身の瞬間（とき）

俺はどうとうこの世界で変身した。
もうひとつの姿、ウルトラマンダイナに。

その巨人は青い光線（フラッシュバスター）を謎の球体に向かって放った。

その一撃だけで無数にも思えた球体は十体弱を残し、爆発した。

「……」

たぶんここにいる全員が状況を飲み込めていないだろう。

「シュワッ！」

巨人が残りの球体にとどめを刺そうとした時、球体が、授業の際に使用した鋼鉄の残骸に近づいた。

そして、なんと融合を始めた。

ギユロンギユウウウジュワアア

千冬「何をしているんだ……」

箒「織斑先生！形が出来あがってきています！」

セシリア「動物……のような形ですわ」

千冬「……違う、あれは動物なんかじゃない。怪物だ」

千冬の言うとおり、できあがったのは鋼鉄の皮膚をもつ二足歩行の怪物だった。

ダイナ（ネオダランビア……？）

いや、メタルダランビアとでも言うべきだろうか。

姿はネオダランビアだが、身体が鋼鉄で構成されていて、銀色に輝いている。

メタル「グオワアアアアアアアア！」

メタルダランビア（以下ダランビア）は両腕の触手を伸ばし、攻撃してきた。

ダイナ（当たるか！）

ダイナは左右に攻撃をかわしながら、ダランビアへ向かってゆく。そしてダランビアの腕を掴んで封じたが、

ブギャン！

ダイナ「グア！」

口から放たれた光弾をまともに喰らってしまった。

ダイナ（こいつ・・・以前よりかなり強くなってる・・・）

ブギャン ブギャン ブギャン ブギャン ブギャン

ダランビアが追い討ちとばかりに光弾を撃ってくる。

ダイナは避けるのがやつとで反撃の機会が掴めない。

グッ！

ダイナ（くっ・・・しまった・・・）

避けることに気を取られ、相手に隙を見せてしまった。

ダランビアは鉋状に変化させた腕を伸ばして、ダイナの首を捕らえた。

ダイナ「シユワ」シユバ パリン

腕ごと切断しようとダイナスラツシユを放つが、傷一つつかずに割れてしまった。

ダイナ（このままじゃ・・・）

そのとき

シユ~~~~ドガアアアアアア

ガツツイーグル「ダイナ！大丈夫か！」

ガツツイーグルがダランビアの口にミサイルを放ち、怯ませた。

ナイスプレイ！さあ、反撃の時だ！

ダイナはダランビアの腹めがけて強烈なキックをお見舞いした。

ヒットした部分周辺に火花が飛び散る。

流れがダイナの方へ回ってきた。

右ストレート、左アツパー、肘打ち、頭突きと次々に攻撃が決まっ

ていく。

ダイナ（とどめだ！）

ダイナ「ジュワ！」

両腕を十字型に組んで青色の光線を放った。

ソルジエント光線、ダイナ最大の必殺光線だ。

ダランビアは亜空間バリアーを張るがソルジエント光線の前には通用せず、直撃し、オレンジ色のサインカーブを描いて大爆発を起した。

敵を撃破したダイナは大空へと飛び去って行った。

箒「あの化け物を……」セシリア「一発で……？」

千冬「何者なんだ……彼は……」

巨人の活躍を見ていた者は皆、そう思っただろう。

「見た……!?今の!」「見た見た!あんな大きいのを倒しちゃった!」

「そうさそう。おきくてさかっこよかったさ」

千冬（は!そういうえばアスカは、アスカは無事なのか!）

巨人への賞賛の声の中、千冬はアスカの無事を案じる。

だが心配は無用だった。

アスカがグラウンドの方から颯爽と歩いてきた。

箒「アスカ!無事だったのか!?!」

セシリア「お怪我はありませんか?」

アスカ「ああ!だって俺は不死身のアスカ様だぜ?」

千冬「しかし、あの攻撃の中でよく無傷で帰ってこれたものだ」

アスカ「巨人に助けてもらったんですよ。あの光の巨人に」

千冬「助けてもらった……?彼は味方なのか?」

アスカ「もちろん!ウルトラマンダイナは平和を守る戦士ですから!」

「「ウルトラマンダイナ?」」

三人が口を揃えて言う。

アスカ「そう！ダイナミックのダイナ！ダイナマイトのダイナ！」
千冬「ふむ、彼が危険ではないことはわかった。だが問題は別にある」

アスカ「？」

千冬「何故お前の専用機は、装着者がいないにも関わらず動いた？
まるで意思を持っているかのよう」

アスカ「あ、いや、その……」

千冬「理由を知っているな？白状しろ」

アスカ「……はい」

俺はガッツイーグルの中に感情があるということ話を話した。

千冬「本当か……？にわかには信じられんが……」

「残念ながら真実です」

アスカの腕輪から声がする。

「わたしはそこにいるセシリア・オルコットさんとの試合の中で、アスカの強い意思に共鳴し、【感情】が生まれた。喜び、悲しみ、怒り、恐怖……色々だ。そしてさんざん攻撃を喰らい装甲が砕けた瞬間に、恐怖心が戦う意思を抑え込んでしまったんだ」

だから最初、思うように動かなかったのか……

「だが、アスカはそんな状況にも関わらず、決して諦めなかった。その姿にわたしは勇気を貰った。そして戦えたんだ。今回はその私の意志で勝手にやらせてもらった。誠に申し訳ない」

アスカ「謝ることないって、な？箒、セシリア」

箒「うむ、主人のために命を張るなど見上げた奴だ」

セシリア「ええ、なかなかできることはありません」

アスカ「千冬……」

千冬「……ああ、確かに君には謝る必要なんてない」

アスカ「千冬……！」

千冬「謝るべきなのは教官命令を無視したお前だ、アスカ！」

アスカ「俺!？」

千冬「なんだお前は！格好つけた割には早く戦線から離れて気絶？」

情けないにも程がある！」

千冬「罰としてグラウンドの残骸撤去が終わるまで毎日作業に参加しろ！……ガッツイーグルもな」

アスカ&イーグル「！……はい！」

千冬「よし以上、午前の授業は中止だ！午後から授業が再開するので各自準備をしておくように」

「！」「はい！」「！」

千冬「それでは解散！」

解散の令がかかった瞬間に俺達はグラウンドへ急ぐ。

「よかったのか？『俺がダイナだ！』って言えばお咎めなしどころか表彰ものだったのに」

アスカ「どうせ信じないだろ。それにみんなが怖がるかもしれないし」

「そういう心配が君らしいな」

アスカ「ま、時期がきたら話すよ」

「それがいいな」

ある日のこと、

「アスカくん、ねえ、転校生の噂聞いた？」

アスカ「いや……全く……」

自慢じゃないが、高校時代はかなり噂や流行に疎かった。部内で『○○と××が付き合ってる』と事実を伝えられて初めて知った、ということも少なくなかった。

「なんでも中国の代表候補生だって！」

アスカ「へー、どんな奴だろ」

？「呼んだかしら？」

教室の入り口から声がしたので見てみると

腕組みをし、片膝を立ててドアにもたれていた。

ツインテールが似合っていて、えらく制服が改造されている。

初対面で失礼だとは思ったが心の中で（この外見であの仕草と言葉遣いは似合わないってレベルじゃねーな…）と考え、若干引いてしまった。

？「呼んだかしら？」

アスカ「ああ、ごめんごめんえくと…」

？「凰 鈴音」

鈴音、鈴音… 鈴でいいか。

アスカ「で、なんの御用事で？」

鈴「なんか気に障るわね… 今日には宣戦布告に来たの！」

アスカ「宣戦布告って… 仲良くしようぜ…？」

鈴「勘違いしてるようだけどクラス対抗戦のことよ？」

アスカ「ならよかったよ、初対面でギスギスしてるのは嫌だからな」

鈴「あたしだって初対面の相手に喧嘩ふっかけるほど馬鹿じゃないわよ」

アスカ「うんうん！それじゃこれからよろしくな！」

やっぱり普通が一番だな。普通に友好関係を築いて、普通に学園生活を送る。それが俺の目標だ。

昼休み、今現在、部活に入れない俺が一番楽しみにしている時間だ。最初は自炊をしていたが、次第に面倒くさくなって、今は朝・昼・晩、毎日食堂を使わせて貰っている。

アスカ「でも、馬鹿にできないんだよな」

そう、めちやくちや飯がうまいのだ。もうファンになってしまった。

鈴「ん？あんたたってたしか… ごめん名前は？」

アスカ「アスカ・シンだよ」

鈴「で、あんたも昼ごはん？」

アスカ「そうなんだけど… とりあえずどいてくんない？食券出せないんだ」

鈴「あ、ごめん」

素直にどいてくれた。実に気持ちがいい

.....

アスカ「なあ……ラーメンのびるぞ」

鈴の持つているお盆に鎮座しているラーメンを見て言う。

鈴「う、うるさいわね。待っててあげてんでしようが」

アスカ「別に待っててくれなくてもいいんだけど」

鈴「いいでしょ別に！」

アスカ「なんで怒るんだよ……て痛っ！」

箒に足を踏まれた。おい！今のは絶対わざとやったろ！

セシリアはなんかもものすごく怖い眼で俺を見てるし……

俺、何か悪いことした？むしろ良いことばかりしてると思うんだけど……

疑問が残るがひとまず置いておこう。

昼飯を受け取って空いているテーブルに着席する。

アスカ「さて！食おうぜ食おうぜ！」

鯖の塩焼きのこんがりついた焼き目に涎が出そうになる。

本当に、この飯はうまい。これだけははつきりと言える。

ちなみに箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを買っていた。

いつつと同じようなもの食ってるな、この二人。もつと別のもの

食ってみたらどうだ？

鈴「そういえばさー」

鈴が話題を出す。

鈴「あんたってみんなに『アスカ』って苗字で呼ばれてるけど、いの？」

以外にも俺の話題だった。

アスカ「ああ、いいんだ。尊敬してた親父が背負った名前だからな。みんなにとってはただの苗字かもしれないけど、俺にとっては特別な名前なんだ」

箒「そうだったのか……で、今その人は何をしているんだ？」

アスカ「俺にもわからない。親父は勇敢なパイロットだったんだ。」

でも、航法実験のときの事故で宇宙のどこかに消えてしまったんだ
セシリア「消えた…？」

アスカ「ああ、どこで何してるんだろうな…」
そういえば記念日はもうすぐだっけ…

鈴「なんかごめんね？静かにしちゃって」

アスカ「いや！全部吐き出したからスッキリしたよ！」

セシリア「お食事中に、そのような表現は謹んでくださる？」

箒「まったくだ」

アスカ「はは、ごめん」

その後は何気ない会話等で盛り上がり楽しい昼食を過ごした。

そしてクラス対抗戦当日、第二アリーナにて

第一試合、1組VS2組 すなわち俺と鈴だ。

俺の視線の先には、鈴とそのIS『甲龍』《シエンロン》が試合開始
のときを待っている。

肩の横に浮いた棘付き装甲《スパイク・アーマー》がやたら攻撃的
な自己主張をしてくる… あれで殴られたら痛いじゃ済まなそうだ
な…

「アスカ、絶対にあれは避けてくれよ…？痛そうで堪らん」

アスカ「ISに痛い何てあるのかよ」

「失礼な！わたしをそんじやそこらのISと一緒にするな！」

アスカ「あーはいはい」

俺も口うるさいISを起動する。

アスカ（こいつうるさくなけりや完璧なのに…）

「聞こえているぞー！」

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中で向かい合う。

鈴「アスカ、頼めば手加減してあげてもいいわよ」

アスカ「真剣勝負だ、手加減はいらぬ」

これは強がりでもなんでもない。ただ単に、こういう真剣勝負の場で手を抜かれるのが大嫌いなだけだ。

『それでは両者、試合を開始してください』ビーツ
ブンツ！

ブザーの音が切れた瞬間、鈴は俺に襲い掛かってきた。

俺はそれを紙一重で避ける。

鈴「ふうん。初撃をかわすなんてやるじゃない。けど……」

鈴が手に持っている異形の刀に手こずる。

このままじゃ消耗戦になるだけだ。距離をとって……

鈴「甘いっ！」

鈴の肩アーマーがスライドして開く。そして中心の球体が光った瞬間、目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

アスカ「ぐあっ！」

見えない拳に殴られて、地表に打ち付けられる。

アスカ（確かあれって……）

以前、放課後特別講習のときに山田先生から教わったが、ど忘れしてしまった。

『衝撃砲』だな。

アスカ（それだ！）

——空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、

余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。視覚化する方法はあるっちゃあるが、教えないほうがいいのだろうか？ ——

アスカ（当たり前だ）

——ならわたしは黙っているよ ——

とは言ったものの、どうやったら見えるようになるんだ？……！！

そうだ！閃いたぞ！

——アスカ！何か閃いたか!? ——

アスカ（ああ！一回しか使えないけどな）

鈴「どこ見てんのよ！」

鈴が衝撃砲を撃つ準備を始めた。

定。ロックされているぞ！

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力、デキサスビーム並の攻撃力、怪獣を一撃で粉碎する程の攻撃力、それを持った敵にロックされている。

やっべえ、ピンチだ。

鈴『アスカ、早く！』

鈴は既にピットへ避難していた。

アスカ「！……なんだこいつ……」

姿からして異常だった。深い灰色のボディ、つま先よりも下に伸びている異常に長い手、頭と肩が一体化しているような形、そしてなによりも異常なのが、『全身装甲』《フルスキン》だった。

—— 無人機、だな。本来はこの学園の警備にあたるものが何者かに奪われ、改造されて送り込まれたのだろう。——
どうりでそんな異常な形をしている筈だ。

『アスカくん!!今すぐアリーナから脱出してください!すぐに先生たちがISで制圧に行きます!』

山田先生がいつもより威厳のある声で指示を出す。

だが、それは俺にはできない。

アスカ「すいません。俺は相手に背を向けることはできません。先生が来るまで俺が食い止める!」

鈴『アスカ!あんた本気で言ってるの?』

アスカ「当たり前だろ!それに遮断シールドを突破できるのがわかった以上、誰かが食い止めなければ観客席の人間に被害が及ぶ!」

鈴「だったらあんたじゃなくても、って聞いている?」

—— メカニック・スキャン!ガッツイーグル ——

アスカ「いくぜ!」

—— 異常事態だ。わたしも戦う ——

キュオオオオオ

無人機がなにかを始めた

アスカ(あれて……)

—— まずい!離れろ! ——

灼熱地獄の奇跡

スファイアが融合した姿は無人機がそのまま巨大化したような姿だった。

よくみると所々スファイアの発光器官がある。そしてより凶暴な姿になっている。

アスカ「スファイアの野郎！」

グラアアアアアアアアアア!

アスカ「ガッツイーグル！」

—— おう! ——

ガッツイーグルと離れて地上に立つ。

—— フライトモード! ——

ガッツイーグルは戦闘機の形になって空から、俺は銃火器で地上から攻撃を開始した。

アスカ「ガッツブラスター・ナパーム！」

ナパームモードを使い、スファイア無人機（以下スファイア機）を攻撃する。

バギユ バギユ バギユ

しかし大したダメージを与えられない。

—— メカニック・スキャン! アートデッセイ号!

ン
ビピユン ビピユン ビピユン ビピユン ビピユン ビピユン

スファイア機「グルオアアアアアアアアアアアアアアアア！」

—— くっ! 効かないのか ——

スファイア機「ビ・ビ・ビ・ビ…… グガガガガガ」

アスカ「まずい! 観客席に向かってる！」

キュウウウウウウウウウウ…… ボガアアアアアアアアアアアアアアアア!

すかさずチャージショットを撃つ。

山田「遮断シールドがレベル4に設定、しかも扉が全てロックされています！」

箒「何故そんなことに…。」

セシリア「まさかあのI.S.の仕業ですよ!？」

千冬「恐らくそうだろう。これでは避難することも救援に向かうこともできない」

何もできない自分への苛立ちなのか、千冬はせわしなく画面を叩いている。

鈴（アスカ…。）

鈴は自責の念でいっぱいだった。

あのとき強引にでもアスカを避難させていれば、説得していれば、自分が戦えばアスカはこんな危険なことをしないで済んだんじゃないか。そう思ってしまうのだ。

鈴（神様お願い！アスカを助けて！）

千冬「彼さえ来てくれれば…。」

スファイア機「フフフフフフフフハハハハハハ」

レーザーの雨に逃げ回る俺を嘲笑うかのように、胸の顔の部分が微笑む。

その瞬間、グラウンドが業火に包まれた。

アスカ「うっ…。」

熱い… 苦しい… 早く変身してあいつを倒さないと… みんな死んじゃう…!

アスカ「ガッツイーグルウウウ!!!」

消火弾投入!

バン! バン! シュウウウウウウ

消火弾でアリーナは白い霧に包まれた。

今だ! アスカ!

アスカ「ナイスプレイ!」

いくぜ!

アスカ「ダイナアアア!」ピカーン
シュイイイイイイン!!

山田「アリーナ中央に… 例の巨人出現…。強いエネルギー反応です!」

千冬「来てくれたか…」

鈴（なんなの…? あれ…）

箒「ウルトラマンダイナ… だったか」

セシリア「前にアスカさんがそう言っていましたわ」

鈴「ダイナ…」

ダイナ「シュワ!」

スファイア機「ホホホホホホ、フフフフ」

ダイナが先制し掴みかかる。

ジュワアアアアアア ボボボボボン!!!

しかしスファイア機の全身から滲んでいる体液にふれた瞬間、爆発を起こした。

ダイナ「グアツ!」

スファイア機「フフフフフフオオオオオオ!」

ビイイイイイイイイイイイ!

怯んだところにレーザーを撃たれ、さらにダメージを受ける。
ダイナ「クツ!」

しかしやられてばかりでいる筈がない。

爆発覚悟でスファイア機にパンチを叩き込んでゆく。

ボオン! ボオン! ボオン! ボオン! ボオン!

叩き込んだ拳が燃え上がる。だが攻撃をやめる事はない。

鈴「恐れがない… すげい…」

スファイア機「フウウウウハハハハハハ」

ダイナ（だんだん笑いに余裕が無くなってきたな！）

ビュウウウウン！

ダイナ（何度も同じ手は食うか！）

頭からレーザーを撃たれるも寸前でかわす。

そしてすかさずフラッシュバスターを撃つ。

しかし命中する寸前で軌道がずれてしまい、地面で爆発を起こす。

当然スファイア機は無傷だ。

ダイナ（なに！）

スファイア機「フフフフフフ……ドウシタ」

ダイナ「野郎！」

箒「ビームが直角に曲がった……？」

セシリア「どういうことですか……？」

山田「あの機体からは尋常じゃない温度の熱が放出されているんです。多分その熱がビームの軌道を変えてしまったのかと」

千冬（今、あの巨人が喋ったような……）

スファイア機「フフフフフフ……ハッ!!」

胸の顔の目が光った。そしてダイナの身体は炎に包まれてしまっ
た。

ダイナ「グアアアアッ！」

スファイア機「ウウウウ！」ビカツ！ビカツ！ビカツ！

追い討ちといわんばかりにダイナを焼く。辺り一面火の海、地獄
だ。

ダイナ「グオアア!!」

ダイナ（熱い……苦しい……！）

ダイナはスファイア機の圧倒的火力に苦しめられ、膝をついてしまっ
た。

「女子生徒は何が起きたのかわからず固まっていたが、自分を守るために盾になってくれたのだと理解し、ペコリと一礼して逃げた。」

ダイナ「グツ……！」ピコン ピコン

ダイナの胸のクリスタル、「カラータイマー」が青い輝きから、赤い点滅に変わった。

山田「あれは何を示しているんでしょう？」

———— カラータイマーだ。あれが点滅しているということは彼のエネルギーが少なくなっているということだ

千冬「要は危険信号か」

教師A「砲撃準備！」

カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ
カシャ カシャ

教師A「撃てえええ！」

ドカン ドカン ドカン ドカン ドカン ドカン ドカン ド
カン ドカン

合図と共に一斉射撃が繰り出される。

セシリア「ブルーティアーズ！」

ビュン ビュン ビュン ビュン

鈴「衝撃砲！」

ドオオオオン！

———— ミサイル！ ————

ドッ リュウウウウウウウウウウ！

スフィア機「フフフフ……ガ!!…… フフガガガアア!!」

四方八方からの猛攻撃に苦しみの声をあげるスフィア機。

セシリア「実弾は通るのね……」

千冬「青いダイナは超能力戦士…：か」

ダイナ「シユワツ！」

シユルシユルシユルシユルシユル

ダイナは大破したアリーナの部分をサイキックパワーで、ある程度直してから去っていった。

「神様…：ありがとう」

鈴は去ってゆくダイナのことを見ながらそう呟いた。

箒「アスカー！」

セシリア「アスカさん！いたら返事をしてください！」

鈴「アースーカー！どこー？」

山田「アスカくーんどどこですかー！」

千冬「ん？いたぞ！」

アスカ「おーい！勝ったぜーッ！」

箒「心配したんだぞ！戻ってこないから」

セシリア「そうですわ！」

アスカ「ごめんごめん。いやー、ダイナが来てくれなければ危なかったぜ」

鈴「本当よ！まあ…：でも…：少し格好良かったわよ、戦ってる時のあんた」

アスカ「今なんて…：？」

最後の辺りが聞き取れなかったので素直に尋ねた。

鈴「ああー！もう、知らない！」

アスカ「なんで怒ってんだよー」

鈴に聞こうと思ったら、そこで登場鬼教官。

千冬「さあアスカ、盛り上がっていると悪いが、命令無視の罰を受けてもらおう」

アスカ「え？ちよと…：？ほら、俺、戦ってきて疲れてるから…：また後日…：」

千冬「問答無用！グラウンド10週！」

鬼教官め！俺の身体のこともいたわれよ！

千冬「5週追加だ。さっさと行け」

何？この人、読心術でも持つてるの？

ま、これもいつものさりげない日常の一部だし……よし決めた。

楽しむ！この世界を！そして守る！

アスカ「アスカ・シン！これより罰を執行いたします！」

俺はいつものように沈みかけた夕陽をの後ろを追うように走り出した。

男と男（？）の友情

「約束したのに……明日の試合は僕が投げてるんだよ」

「シン、お前が明日の試合に行かなければ皆が困るように、父さんが行くのを皆待つてる。わかるな？」

「うん……その代わり、帰ってきたら野球で勝負して」

「勝負？」

「父さんが負けたら、一日僕の言うことを聞くんだ。仕事もみんな休んで」

「ああ、男の約束だ……父さんはすぐに帰ってくる」

「うん！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

アスカ「はっ！」

アスカ「夢か……」

いい夢ではなかった。親父と交わした最後の会話。あのあと親父は行方不明になった。

とにかく、嫌な夢だった。

アスカ「……もう一回寝るか」

アスカ「あー！ やっぱりうめー！」モグモグ

箒・セシリア・鈴「……………」

朝食の時間、いつものように四人で食っている。

夢はどうなったか？朝飯一口食ったらどうでもよくなったよ。

箒「おいアスカ……」

アスカ「な、なんだよ」モグモグ

箒「いい加減にしろよ？」

アスカ「何が？」モグモグ

鈴「『何が？』じゃないわよ！あんたそれで何杯目よ！」

何杯って…： えーと

アスカ「五杯目だな」モグモグ

鈴「知ってるわよ！」

じゃあなんで聞いたんだよ。

セシリア「それに納豆なんてよく食べられますわね…：…」

箒「納豆は別にいいが生卵を入れて食うのはちよつとな…：…」

アスカ「おい、納豆+葱+辛子+生卵のコンボを馬鹿にするなよ」モグモグ

これは本当にうまい。納豆自体嫌いな奴もそうだが、葱と辛子と醤油だけで満足している奴ももつたない。

アスカ「なんなら食ってみるか？」モグモグ

箒・セシリア・鈴「「遠慮します」」

アスカ「うまいのにな」モグモグ

朝の何気ない光景だ。

朝食を済ませ（ちなみに時間的に七杯が限界だった）教室でハネジローの朝飯（購買で買ったあんぱん？90）に付き合っていると

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」「え？そう？ハヅキのつてデザインだけって感じしない？」「そのデザインがいいのー」「私は性能的に見てミューレイのものがいいかなあ。特にスムーズモデル」「あー、あれねー。モノはいいけど高いじゃん」

クラス中の女子がわいわいと賑やかにカタログ片手に意見交換会をしている。

「そういえばアスカ君のISスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」

アスカ「あー、あれ厳密にはISスーツじゃないんだよ」

「え、そうなの？」

アスカ「ああ、一年くらい前に所属してた組織の物で、機動性も防御性にも優れてるから作る必要もねえかってことであれ使ってた。」

「へー。あ、でも専用機君はどう思っているのかなー？」

ガッツイーグル「私もアスカにISスーツは使って欲しくないな」

「なんで？」

ガッツイーグル「今まで以上にアスカの身体に密着しないといけないだろ。考えただけで……うう、ぞっとするな……」

アスカ「おい！そんなこと言うんじゃないぞ！攻撃するぞ！」

ガッツイーグル「すまない……スクラップは嫌だ」

普通のISはスーツなしだと反応速度が鈍るらしい。何でだっけ……？

山田「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。またこのスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませのであしからず」

すらすらと説明しながら現れたのは山田先生だった。

ガッツイーグル「ちなみにわたしはアスカの動き、思考を完全に読み取って最適な行動をとる進化したISだ」

聞いてねえよ。

「山ちゃん詳しい！」

山田「一応先生ですから……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

山田「今日が皆さん専用のスーツの申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん……って山ぴー？」

入学から二ヶ月。山田先生には8つくらい愛称がついていた。慕われている証拠だ。多分。

千冬「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

アスカ「お、ハネジロー食い終わったか、うまかったか？」

ハネジロー「パムー」

アスカ「そうか、よかつ痛てっ!!」バシン

ハネジロー「パム!？」

千冬「挨拶はどうした、アスカ・シン」

アスカ「おはようございます。織斑先生……」

千冬「おはよう、ハネジロー」ナデナデ
無視すんなよ暴力教師!

ガン!

得意の読心術を使われたのか、二度目の鉄拳制裁を食らった。

し、だ —— 口は災いのもと、さわらぬ神に祟りな

山田「ええと．．．今日はなんと転校生を紹介します!しかも二名です!」

「「ええええええええええええええつ!?!」」

三度の飯より噂好きの十代女子の情報網をかくぐつて、いきなり転校生が現れたことによりざわめきが生まれる。

アスカ(ていうか、ふつう転校生つて分散させないか?)

そんなどうでもいいことを考えていると教室のドアが開いた。

? 「失礼します」

? 「．．．．．」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

そりやそうだ。

だって、そのうちのひとりが —— 男子だったんだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」
転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。
あつけにとられたのは俺を含めてクラス全員だろう。

「お、男．．．?」

誰かがそうつぶやく。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を ——」

人懐っこそうな顔。礼儀の正しい立ち居振る舞いと中性的に整っ

た顔立ち。髪は濃い金髪。それを首の後ろで丁寧に束ねている。身体はともすれば華奢に思えるくらいスマートで、しゅっと伸びた脚が格好いい。

あとちよつと可愛いと思っちゃった。

もう一人は、輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを腰近くまで長くおろしている。整えている風はなく、伸ばしっぱなしという印象だ。そして左目にガチな黒眼帯。養成所のすつげえ怖い教官がしていたアレ。

アスカ（あのオッサンまだ教官やってんのかな）

印象はいうまでもなく『軍人』。身長はシャルルと比べて明らかに小さいが、その全身から放つ冷たく鋭い気配がまるで同じ背丈であるかのように見るものを感じさせていた。

ちなみにシャルルは男にしては小柄な方だが、もう一人の転校生は女子の中でも若干背が低い部類だろう。

千冬「挨拶をしろ、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

千冬「ここでは織斑先生と呼べ」

ラウラ「了解しました」

ラウラ「ラウラ・ボーデウィツヒだ」

「……………」

クラスメイト達の沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた貝のように口を閉ざしてしまった。

山田「あ、あの、以上……ですか？」

ラウラ「以上だ」

空気にいたたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに聞くが、返ってきたのは無慈悲な即答だけだった。

おい、先生をいじめんじゃねえよ。今にも泣きそうな顔をしてんじゃないねえか。

そんなことを考えていたせいか、ラウラとばっちり目があう。

アスカ「よう、よろしくな」

ラウラ「！ 貴様……………」

うん？なんだ？つかつかとこつちにやってくるぞ。
手を差し出してゐる。友好の握手かな？
そう思っていると、

バシンッ！

アスカ「うえ？」

いきなり殴られた。それも無駄のない平手打ち。——は？

ラウラ「私は認めない。最強のISを所有するのは貴様ではない」
え？なんで俺殴られたの？たしかコイツ最強とか言ってたよな。
だから殴られたの？だったら迷惑な話だ。一体誰がそんな噂
を……って、んなこと考えてる場合か！

アスカ「いきなり何しやがる！」

ラウラ「ふん……」

来たとき同様すたすと俺の前から立ち去るラウラ。空いている
席に座ると腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。

うわあ、無視しやがった。

千冬「あ……ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グ
ラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」
ぱんぱんと手を叩いて千冬が行動を促す。

俺は無茶苦茶腹が立っていたがそれも言ってもらえない。

このままクラスにしていると女子と一緒に着替えなければならない。
それは非常に困る。

なので俺は急いでクラスから移動しなければならない。

千冬「おいアスカ。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」
おっとそうだった。

シャルル「君がアスカ君？初めまして僕は——」

アスカ「ああ、いいから。とにかく今は移動が先だ。さあ行くぞ！」

シャルル「え？」

アスカ「走れ！」

シャルル「ちよつと……」

俺はシャルルの手を取ってアリーナ更衣室に向かう。

アスカ「これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれよ」

シャルル「う、うん」

なんだ？さつきまでとは違って妙に落ち着かなそうだな。

アスカ「トイレか？」

シャルル「トイ……っ違うよ！」

アスカ「そうか。それは何よりだよ」

アスカ「ふう〜なんとか逃げ切ったな〜」

言うまでもなく各学年各クラスからの情報先取のための尖兵からだ。

あれに捕まったら最後、質問攻めの挙句授業に遅刻、鬼教師の地獄メニューが待っている。絶対にそうなるわけにはいかん。

シャルル「速すぎるよ……少しスピード緩めてくれても……」

アスカ「え？結構抑えたつもりなんだけど？」

シャルル「嘘!？」

アスカ「シャルルはもう少し体力つけた方がいいな」

シャルル「アスカ君が速すぎるだけなんじゃ……」

アスカ「よし決めた！今日、放課後キャッチボールしようぜ！」

シャルル「え？キャッチボール……？」

アスカ「やったことぐらいあんだろ？今まで頼んできたのに誰も引き受けてくれなくてさー」

シャルル「……うん、いいよ！やろうキャッチボール」

アスカ「おお！サンキュー！あと俺のことは『アスカ』って呼んでくれ」

シャルル「うん、アスカ。これからよろしくね」

アスカ「おう！よろしくな！」

そんな話をしている内に更衣室に到着した。

アスカ「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ」
そう言いながら俺は制服を脱ぎ捨てた。

シャルル「わあ!？」

アスカ「?… どうした？荷物でも忘れたか？つて、なんで着替えないんだ？さっさとしないと遅れるぞ。あの鬼教官は容赦しないからな」

シャルル「う、うんっ？ き、着替えるよ？ でも、その、あっち向いてて… ね？」

アスカ「ああ、別に男の着替えをジロジロ見る気はないが… つてシャルルはジロジロ見てるな？」

別に制服を脱いでガッツアーマーに袖を通すだけだから問題ないが。

シャルル「み、見てない！別に見てないよ!？」

なんでこいつこんなに反応するんだ？不思議なやつだなあ。

そのあいだに俺は上着に袖を通して着替え完了！

アスカ「シャルル？」

気になって視線を向けると既にISスーツに着替え終わっていた。

アスカ「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんの？」

シャルル「い、いや、別に… つてアスカ、なにその格好？」

アスカ「これが俺のISスーツみたいなもんだ」

シャルル「これが？」

アスカ「すげえぞこれ。火炎、冷氣、加圧、銃弾、光弾、放射線とか全てに耐性持つてんだぞ？そんなじゃそこらのISスーツより遥かにいいだろ？」

シャルル「へー！すごいね!？」

アスカ「シャルルのスーツは着やすそうだな。どこの？」

シャルル「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフアランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

アスカ「デュノア？デュノアってどこかで聞いたような…」

シャルル「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしているんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

アスカ「へえ！じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理で」
シャルル「道理って？」

アスカ「いや、気品っていうか、いいところの育ちって感じがするじゃん。野球で毎日泥と傷だらけだった俺とは違うなーって」

シャルル「いいところ……ね」

ふと、シャルルが視線を逸らす。それは何か触れられたくないところだったのだろうか。複雑な表情を浮かべている。

シャルル「それよりアスカのほうがすごいよ。聞いたよ？生身でISに勝っちゃったんでしょ？」

アスカ「あれは武器が良かったんだよ」

シャルル「いや、ISの速度についてくだけでも凄いのにさ——

アスカ「つてやべえ！時間過ぎてんじゃねえか！」

ついトークに夢中になってしまった。本日二度目のダッシュだ。

千冬「遅い！」

アスカ「痛っ」

つたくこの女、顔合わせる度に暴力振るってくるな……

千冬「下らんことを考えていないでさっさと列に並べ！」

ばしーん！

また叩いたよこの人。

俺とシャルルは一組整列の一番端に加わる。

セシリア「ずいぶんゆっくりでしたわね」

なんでセシリアは四月の代表決定戦以降、やたら構ってくるんだろ？

セシリア「そのスーツに袖を通すだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

ちなみにISスーツは一般的には女性用なので、見た目はワンピース水着やレオタードに近い。

部分的に肌の露出があるのは動きやすいように考慮されているらしい。

実際、防御に関してはISのシールドバリアーがあるのでスーツ面積が少なくても問題はないらしい。

ところがシャルルのISスーツは違う。全身すっぽり、首のところまで露出しているのは頭と手と足くらいだ（俺に至っては頭だけだが）

アスカ「道が混んでいたんだよ」

セシリア「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」

アスカ「話し込んでたら時間が過ぎてたんだよ」

セシリア「そうですかそうですか」

なんでセシリアの言葉の端々に棘があるんだろう？

千冬「それではこれから八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

千冬が言い終わるや否や、俺とシャルルに一気にニクラス分の女子が詰め寄ってくる。

「アスカ君、一緒にがんばろう！」「わかんないとこ教えてく」「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいられて！」

千冬「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人づつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

あれすごきついんだよなあ……

鶴の一声というやつだろうか。それまでわらわらと蟻のように群がっていた女子達は、蜘蛛の子を散らすように移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからず出来上がった。

千冬「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふうつとため息を漏らす千冬。それにバレないようにしながら、各班の女子はぼそぼそとおしゃべりをしていた。

少しは反省しろよ

「……やったあアスカ君と同じ班つ。名字のおかげね……」「……

セシリアかあ……大丈夫かな……」「……凰さん、よろしくね。あとでアスカ君の話聞かせてよ……」「……デュノア君！わからないことがあつたらなんでも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ……」「……」

ちなみに唯一おしやべりが無いのが例のドイツ転校生ラウラ・ボーデヴィツヒの班である。

張り詰めた雰囲気。人とのコミュニケーションを拒むオーラ。生徒たちへの軽視を込めた冷たい眼差し。さつきから一度も開くことのない口。

そんなラウラの鉄壁城壁には話しかけようがないらしく、みんなちよつとうつむき加減で押し黙っている。

うわーすつげえ可哀想……

山田「いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに來てください。数は『打鉄』《うちがね》が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいいね。早い者勝ちですよー」
こりやあ驚きだ。山田先生がいつもの五倍くらいしつかりしている。いつ元気づいたかは知らんが、その姿は堂々としたもので、眼鏡を外すとそれだけで『仕事のできるオンナ』に見えるようだ。

しかし堂々はいいが、どうも癖であるらしい眼鏡を直す動作にあわせて山田先生の豊満な乳房がぶるんつと揺れている。

アスカ（うわあ……）

ギユムツ！

アスカ「いつてえっ！なんだよ！」

いきなりかかと思いつき足を踏まれた。

全体重をかけた攻撃はポイント、角度ともに絶妙で思わず声をあげてしまった。

誰だこんなことをするやつは……って、一人しかいないか。

アスカ「ひどいじゃねえかよ、箒！」

箒「……エロ野球馬鹿」

アスカ「ひつでえ渾名だな！」

箒「文句があるのか？」

うっ、かなりご立腹の様子。

てか同じ班だったのか。だったら酷い渾名を撤回していただかなければ。

そう思っただけと話しかけようと思った矢先、

「アスカ君、I Sの操縦教えてっ」「あぁーん、このI S重い。私箸より重いもの持ったことない」「実戦訓練の基本はツーマンセルよね。じゃあアスカ君、組みましよう」「ねえねえ専用機ってやっばりいい感じ？いいなー、うらやましいなー」

箒に声をかけようとするがそれより早く同じ班の女子に取り囲まれてしまう。

しかも俺が班長なので適当にあしらうこともできない。

アスカ「えーつと…。」

山田『各班长は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切つてあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ガッツイーグル「わかつたか、アスカ?」

I Sのオープンチャンネルで山田先生が連絡してくる。お節介なI Sもついでに確認してくる。

ガッツイーグル「君の思考とリンクしているんだから考えていることはわかるんだぞ!」

アスカ「へいへい、それじゃ始めるか」

ガッツイーグル「無視をするな!… もう怒ったぞ!」

—— 展開! スタンドモード! ——

俺の手首から離れたガッツイーグルは自立型ロボットののような姿をして現れた。

アスカ「おいこら! 勝手に変なことするんじゃないやねえよ!」

ガッツイーグル「しばらく私はこのままでいるぞ。君に直接やり返せるこの姿でな」

うっぜええええ!

アスカ「お前がその気ならこっちだっただけ考えがある」

ガッツイーグル「聞いてみようか?」

アスカ「今度、待機状態のときに俺のパンツと一緒に洗濯機にぶち込んでやる！」

ガッツイーグル「くっ……ならこっちだって！」

アスカ「な、なんだよ」

ガッツイーグル「シャワーからサラダ油しか出ないように改造してやる！」

アスカ「俺よりも質が悪いじゃねえかよ！」

ガッツイーグル「君が何もしなければ私だって何もしないさ。何

もしなければな？」

ブチッ

アスカ「てめえスクラップにしてやる！」

カチッ

ガッツイーグル「望むところ！蜂の巣にしてくれる！」

千冬「何をしている！」

アスカ・イーグル「あ？……あああ……」

千冬「授業をすっぽかして喧嘩とはいい度胸だな？私も混ぜてもらおうか」

アスカ「あ、いや、あの……お、織斑先生が加わるまでもありませんよ。ほら！俺たちもう仲直り！な？」

ガッツイーグル「おおお、おう！そうとも！なにせ私たちは死線をくぐり抜けてきた大親友だもん？ハハハハ」

アスカ「ハハハハハハ……駄目すか？」

千冬「真面目にやれ！」ドカッ！「うえっ！」ドカッ！「ウグッ！」

アスカ「みんな、出席番号順にISの装着と起動、そのあとの歩行までやろう。」

くそっ、殴られたところがまだ痛い……

「はいはい！出席番号一番！相川清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

アスカ「お、おう。じゃあはじめよう。相川さん、ISには何回か乗ったよな？」

相川「あ、うん。授業でただけけど」

アスカ「じゃあ大丈夫。とりあえず歩行までやっちまおう。放課後居残りなんて御免だからな」

相川「そ、それはまずいわね！よし、真面目にやろう！」

今までは真面目ではなかったかのような発言だが、一旦スルーしておこう。

というわけで一人目は問題なく進んで、二人目の岸里さんへ突入――

――のはずだったのだがちよつとした問題が発生した。

岸里「いや、あのさ、コックピットに届かないんだけど……」

アスカ「あ！ ああ……」

しまった。自分が専用機持ちだからすっかり忘れていたが、訓練機を使う場合は装着解除時にしゃがまないといけないのだ。立ったままISの装着解除をすると当然だがISは立ったままの状態になる。

アスカ「あく、しゃーない、俺がコックピットまで運ぶよ」

岸里「えええくつ、超ラッキー！」

箒「おいアスカ！なんでだつこの必要がある。お前が踏み台になれば済む話だろう！」

アスカ「おいおい踏み台はねえよ。そんな面倒くさいことしなくても、運べば安全も確保できて効率的じゃないか」

箒「つ――好きにしろ！」

また怒らせちゃったよ……

アスカ「ガッツイーグル、来い」

―― ノーマルモード ――

自立型ロボットの姿から、いつもの展開状態になる。

アスカ「せーの」

岸里「ひゃあ!？」

岸里さんを抱きかかえたのはいいが、いきなり変な声を出されてちよつとビビった――うん、おかしいところはどこも触ってない

ぞ。

岸里「アスカ君って強引ね…」

時間押してるからな。てかなんで女子ってこんなに軽いんだろ

——
って、どうでもいいか。

アスカ「ちゃんと掴まっついてくれよ。落ちるから」

岸里「う、うん」

上昇する高さは一メートルといえども、背中から乗る構造上、この高さでも十分危険なのだ。

アスカ「よし、乗れたな。じゃあ動かしてみて

——」

さてと次はだれなのかな？

箒「アスカ、私を運べ。言っておくが安全面を考慮した上で仕方なく出した決断だからな」

君か……

アスカ「はいはい」

箒の身体を抱きかかえると

箒「きやつ——ゴホンゴホン！」

アスカ（なんかかわいい声が聞こえたような…）

—— 空耳だろう ——

空耳か。

アスカ「どうした？」

箒「！ い、いや！なんでもない！」

箒（なんか妙に手馴れているな…）

アスカ「しっかり掴まってるよ。落ちるから」

箒「う、うむ…落ちるといけないから掴まるのは仕方がないな」

箒はさらに「仕方がない」を三回くらい繰り返してから、俺に掴まった。

アスカ「ほいっと」

箒「……」

アスカ「おい、おい。篠ノ之箒さん」

箒「はっ！な、なんだ!？」

アスカ「いや、なんだじゃなくてさ、ISに移らないと実習が進まないだろ。居残りは御免だぜ？」

箒「そ、そんなことぐらいわかってる!？」

アスカ「よーし、じゃあ起動と歩行までやって交代な」

箒「アスカ」

アスカ「ん？何？」

箒「そ、その、だな。今日の昼は予定があったりするの？」

なんかいつもより声が高くないかな？

アスカ「いや、特には」

箒「で、では、たまには昼食と一緒に取るとしよう。それがいい」

アスカ「おお、いいなそれ、高校生らしくて」

こんな話をしながらも箒の歩行には一切無駄がない。余程訓練をしたのだろう。

アスカ「問題ないな。さすが箒。じゃあ"しゃがんで"降りろよ？」

箒「……………」

アスカ「つておい！俺の話聞いてなかったのかよ！なんでISを立たせたまま降りるんだよ!？」

その後もISを立たせて降りる者が続出し、アスカは持ち上げては運ぶ作業に徹していたことは言うまでもあるまい。

千冬「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で判別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように」

アスカ（整備くらい自分で出来るよな？ガッツイーグル）

—— 当たり前だ。わたしに任せろ ——

千冬「ガッツイーグルの整備はアスカ自身ですること。違反行為をした場合はわかってるな？」

アスカ「は、はい！わかっておりますっ!？」

怖えええええええええ

千冬「では解散！」

さあ、お片付けの時間だ。

訓練機を背中に担いで一步一步足を出していく

アスカ「はあ、はあ、はあ……誰か手伝ってくれよ〜」

俺の心の叫びは無情にも誰の耳にも届いていない。

力仕事は男がして当然だと思っっているらしい。まあ、俺もそう思うし、自分は何もせずただ女子に運ばせるわけにもいかないがこれは重すぎる。

アスカ「あああああああ重い!!!」ドシン

もう二度とやりたくない仕事の1つだな。

ちなみにシャルルの班は「デュノア君にそんなことさせられない！」と数人の体育会系女子が訓練機を運んでいた。なんだこの扱いの差は。

アスカ「まあ、いや、いや。シャルル、着替えに行こうぜ」

シャルル「え、ええと……僕はちよつと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

アスカ「いや、別に待つてても平気だぞ？」

シャルル「いいからいいから僕が平気じゃないから！ね？先に教室に戻つててね？」

アスカ「お、おう」

妙な気迫に押されて、ついついうなづいてしまった。しかしコイツはなぜそこまで必死なのだろう。

しかし本人もそう言っていることだし、待つていても仕方がないのでさっさと更衣室へと向かった。

アスカ（ガツツアーマーって防御性や機動性は優れてるけど、通気性は最悪だな）

シャワーを浴びながらそんなことを考え、とつとと着替えて更衣室を後にした。

でも嘘をついているのに変わりはないんだよなあ…

シャルル「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

俺の隣でシャルルがそんなことを言う。さつきもそうだったが、とんでもなく遠慮深くて逆に困るくらいだ。

実を言うと二人目の男子争奪戦とばかりに一年一組には女子が大挙して押し寄せたのだが、ブロンドの貴公子、丁重に丁寧を二乗したような対応でお引き取り願っていた。

何せ言った台詞が

『僕のような者のために咲き誇る花の一時を奪うことはできません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまいそうですね。』

俺が言っても確実に引かれるだけの台詞なのに、シャルルだと嫌味くさくない。

まあ、そんなこんなで女子が引き上げたので俺が誘ったというわけだ。

アスカ「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、協力してやっていこう。わからないことがあつたら何でも聞いてくれ。——IS以外で」

鈴「アンタはもうちよつと勉強しなさいよ」

アスカ「してるって。ただ覚えることが多すぎるんだよ。そのかわり普通教科は優秀だぞ」

鈴「本当なのがなんかムカつく…」

セシリア「適正検査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習を始めますわね」

そういうことらしい。

ちなみに模擬戦でのトータル勝率は鈴が一位、セシリアが二位、箒が三位で俺が四位。かなり情けない結果だ。ガッツイーグル単体で戦ったら負けなしなのに、俺が操縦すると急に弱くなる。

シャルル「ありがとう。アスカって優しいね」

ドキッ

あれ？なんで男相手にドキッとしてんだ俺…

でも素敵な笑

顔だった……って！シャルルは男だぞ?! 落ち着け俺……

アスカ「い、いや、まあ、これからルームメイトにもなるだろうし、約束も取り付けてくれたから…… ついでだよ、ついで」

セシリア「アスカさん、約束とは？」

アスカ「シャルルとキャッチボールする約束だよ」

シャルル「そういえばそんな約束したっけね」

アスカ「忘れたてのかよ」

シャルル「あははははごめん」

アスカ「あくでもシャルルが来てくれて助かったよ」

シャルル「なんで？」

アスカ「キャッチボールに付き合ってくれるし、風呂も使えるようになるし、いい話し相手にもなると思うし、いいことづくめだ。本当に、男同士っていいな」

シャルル「そ、そう？ よくわからないけど、アスカがいいなら良かったよ」

照れているんだろうか、シャルルの言葉がぎこちない。

鈴「……男同士がいいって何よ……」

セシリア「……不健全ですわ……」

箒「……灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め……」

なにやら三人ともぶつぶつ言っているが、聞かない方が身のためだろう。

〜放課後〜

アスカ「やったぜ！放課後だあああ！」

シャルル「アスカ、待ってよ……」

ダツシユで寮へ向かう俺とシャルル。

ん？ 何故かって？ 知ってる癖に。キャッチボールだよ、キャッチボール！

遂に念願の相手が見つかったんだ。もう壁相手に投げる必要はな

い。

アスカ「準備完了！シャルルは終わったか？」

俺は部屋で鞆を放り投げ、ボールとグローブを持つ。

シャルル「う、うん、終わったよ」

アスカ「なら寮前の広場へGOだ！」

.....そして.....

アスカ「よし、じゃあいくぜー！」

シャルル「う、うん、い、いいよ」

最初は軽く投げて肩を温めるか。

アスカ「ほいっと」ポイツ

シャルル「うわっ、きや！」ポトツ

アスカ「え.....？」

嘘だろ？あれ捕れないのか？

アスカ「シャルル..... こっちに投げてくれるか？」

シャルル「う、うん。いくよ？」

シャルル「えいつ」ポイ

アスカ「うあつと！」

シャルルの球は俺の頭の遥か上を通っていく。

シャルル「ご、ごめん」

アスカ「シャルルつてさあ..... もしかしてキャッチボールをいや、

ボールすら触ったことないんじゃない？」

シャルル「だ、大正解.....」

アスカ「やっぱり..... 最初からなんかそんな雰囲気があったんだ

よ」

シャルル「ほ、本当にぬか喜びさせてごめんね」

アスカ「もういいよ、そのかわり.....」

シャルル「そのかわり.....？」

アスカ「俺が教えてやるから今日は俺に付き合え！」

シャルル「う、うん！ありがとうアスカ、本当に優しいね」

ドキッ

う..... またこれだ。なんで男ってわかってんのにドキッとするん

だろ？

アスカ「よし！まずは投げ方だ。まずボールはこう持つて――

――」

.....

アスカ「大分うまくなったじゃん」ピュッ

シャルル「うん、アスカのおかげだね！（まだちよつと手が痛いな）」

バシッ！ヒュッ

アスカ「投げ方も良くなってるな」パシッ

シャルル「先生がいいんだよ」

アスカ「なんか照れるな……」

ああ、楽しい、こんな楽しい時間がいつまでも続けばいいのに……

「ヒカリ、キエロ」

って世の中こんなに甘くないか。でも、でも今こなくてもいいじゃんかよ。

アスカ「……また邪魔しに来たのかよ…… スファイア！」

シャルル「え？ アスカ何を言ってる……！」

アスカ「お前だけは許せねえ！」

シャルル「許せないって…… どうし――」

スファイア「ケケケケケケケケケケ」グニヤアアアア

アスカ「気を付けろ！」

シャルル「何が起こってるの……？」

スファイア「ギャオオオオオオオオオオ！」

アスカ「また厄介な奴になりやがって！」

スファイアが変化した姿は、肉食地底怪獣ダイゲルンだった。

僕のヒーロー

スファイアダイゲルン「ギャオオオオオオオ！」

アスカ「シャルル、安全な場所へ避難しろ！」

シャルル「アスカはどうするの？」

アスカ「決まってるんだろ！アイツを倒す！」

シャルル「倒すって…無理だよ！あんな大きいのに…勝ち目なんて無いって！」

アスカ「へへ、じゃあ尚更行かないとな！ガキの頃から逃げるってのが大嫌いでね！」

そのとき今のアスカには何を言っても無駄だとシャルルは悟った。

アスカ「こつちだ！スファイア野郎！ぜってえ負けねえ！」ダダダダダダ

シャルル「アスカー！……行っちゃった……」

アスカ「こい！ガッツイーグル！」

—— フライトモード！ ——

アスカ「俺もいくぜ！」

アスカはリーフラツシャーを高く上げ、光に包まれて変身する。

ダイナ「ジユワツ！」

シャルル「巨人…？」

スファイアダイゲルン「グルルルルルルガアアアアアア！」ドドドド

ドドドド

スファイアの突進をダイナは身軽によける。

ダイナ「フンッ！」ドガッ！

そしてすかさず背中にエルボを喰らわせる。

スファイアダイゲルン「ギャオオオオオオオオオオオ…」

ダイナ（やっぱり偽物は本物より弱いな！）

スファイアダイゲルン「グルルルル」バシユ シュルシュル
ダイナ「なッ!?!」ギユッ

なんとスファイアダイゲルン（Sダイゲルン）は指から触手を伸ばしてダイナから手足の自由を奪った。

ダイナ（おいおい、反則だろこれは）

Sダイゲルン「ギヤアアア」ガブツ!

Sダイゲルンは動けないダイナの腕に容赦なく噛みつく。

ダイナ「グオオオオオ!」

シャルル「ああ!このままじゃ…」

—— デラック砲! ——

ドガアアアアアアアアア!

—— 少し調子に乗りすぎたな、スファイア ——

ガツツイーグルの放ったデラック砲がSダイゲルの首を撃ち抜く。

ダイナ（喉に風穴が空くとかやっぱり化物みたいな威力だな）ブチッ ブチッ

触手を引きちぎりながら、GUTSのオーバーテクノロジーに感心する。

Sダイゲルン「カアアアアアア…」

ダイナ「シユワ!（終わりだ!）」シユバアアアア!

喉に風穴が空き完全にグロッキー状態のSダイゲルンへ、とどめのソルジェント光線が炸裂する。

ドガガガガガガガガガーン!!!

Sダイゲルンは大爆発を起こして跡形もなく消え去った。

シャルル「す、すごい…」

シャルル「そうだ!アスカのことすっかり忘れて!まさかあの怪獣の下敷きに?」

シャルルはオロオロしてアスカ探す。

シャルル「アスカく！ いたら返事をしてく！」

アスカ「シャルルルー！ 無事だったかー！」

シャルル「アスカ！ 下敷きになってなかったんだね！」

アスカ「当たり前だろ？ あのISを動かしてたのは俺だけ？」

——— そんな嘘をついていいのか？ ———

アスカ（誤魔化すために、今は大目に見てよ）

シャルル「へー！ やっぱりアスカはすごいね！」

アスカ「ああ！… あっ痛！」

シャルル「え？ つてアスカ怪我してるじゃん！ しかもこんな深い傷！」

俺の腕にはダイルゲンの噛み傷が残っていて、制服の一部を赤く染めていた。

アスカ「大したことないって、つて痛ッ！」

シャルル「駄目だよ！ すぐに治療しないと。ほら保健室いこ？」

アスカ「あ、ああ。シャルルがそう言うなら…。」

なんでシャルルに言われると納得してしまう自分がいるんだ？

保険医「はい、もう無理するんじゃないわよ？」

アスカ「はい、すみませんでした」

そう言って保健室を出る俺。何度目だここに来たの。

そう考えながら一人で寮へ向かう。

なんで一人なのかというと治療に時間が掛かるとみたのか、シャルルが『悪いけど先に寮に戻ってるよ』と言ったからだ。

——— どうした？ 今日珍しく苦戦したじゃないか ———

アスカ（苦戦なんていつもしてるだろうが）

——— いや、今回は別の理由で戦いに集中していなかっただろう？ ———

アスカ（うつ…： そうなんだよなあ…： なんかシャルルに違和

感があつてさー)

—— 出会つて間もないのにもう違和感か ——

アスカ(ああ、なんか偽りつていうか… 本当の自分を出してないっていうか…)

—— その点では君も似たようなものだろう? ——

アスカ(そうなのかな…)

—— ま、帰ったら本人に、熱いお茶でも飲みながら聞いてみよう ——

アスカ(そうすつか… つてもう部屋着いたのか)

近いのか遠いのかよくわからない距離だ。

アスカ「ただいま… つていない?」

アスカが帰ってくるちよつと前の時間。

シャルル「… はあつ…」

寮の自室へ帰ってきたシャルルは吐き出すようにため息を漏らした。

シャルル(なんだったんだろう… あの巨人…)

巨大な怪獣に怯まずに、勝利を納めたあの巨人の姿を鮮明に思い出す。

シャルル(それに… アスカも)

自分の何十倍も大きい怪獣に、臆せず立ち向かっていった。

シャルル(もつと早く出会っていたら… 僕の運命は変わってたのかな…)

そんなことを考えると、ますます落ち込みに拍車がかかる。

シャルル(… シャワーでも浴びて気分を変えよう)

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった。

アスカ「ただいま〜… っていない？」

と思ったが、すぐにシャワールームから響く水音に気づく。

アスカ「なんだシャワー中か。… そういえばボディーソープ切れてたな」

昨日切れたのだが、俺の悪い癖『後でいいや』が発動し、そのままだった筈だ。

—— だからあの時替えておけと… ——

まさかその翌日に転校生、しかも男が来るとも思わなかったので、『次にシャワー浴びる時でいいや』と考えていたのだ。やっぱりすぐに行動しないとな。

アスカ（たぶん今シャルルも困っているよなー。届けてやるか）

シャワールームは洗面所兼脱衣所とドアで区切られている。とりあえず脱衣所まで持って行って、そこで声をかけたらいいだろう。

そう思っって洗面所へと入る。

ガチャ

—— ガチャ？

ドアはさつき開けて入ったから… あ、シャルルがシャワールームのドアを開けたのか。きつとボディーソープをさがしにきたんだろ。

アスカ「ああ、ちょうどよかった。ほら、替えの——」

シャルル「ア、ア、アス… カ…？」

アスカ「へ？」

シャワールームから出てきたのは、見たことのない『女子』だった。どうして女子だと分かったのか。簡単だ。胸があつて、男にあるべきものが無い。

濡れた髪はわずかにウェーブがかかったブロンドで、柔らかさとしなやかさを兼ね備えている。すらりとした体は脚が長く、腰のくびれが実質的な大きさ以上に胸を強調して見せている。

金髪紫眼という外見から日本人ではないことはすぐにわかる。そのせい、Cカップくらいのバストが大きさは関係なく妙に際立つ

ている。水を弾く若々しい肌には珠の雫が乗っついていて、宝石をちりばめたかのように美しい。だが全裸なのだ。毛など生えていない瑞々しい体に、俺の眼は釘付けになってしまっていた。眼が微妙に潤んでいるのが非常にエロい。

アスカ「えつとだな、えーと……」

目の前の裸の女子はどこかで見たことある気がするんだがするんだが、混乱していて思考がまとまらない。ええと、ブロンド……ブロンド……

? 「きやあつ?!」

ガチャ!

ハツと我に返った女子が慌てて胸を隠しながらシャワールームに逃げ込む。

もう上も下もはつきり見えちゃったな…… ってそうじゃねえ!

アスカ「ぼ、ボディーツープ、ここに置いとくからな……」

? 「う、うん……」

よくわからないやりとりをして、俺はシャワールームのドア前にボトルを置くと脱衣所を出た。

アスカ「あああああああああ!」

—— うわっ! 急にどうしたんだ? ——

何がどうなつてんだ? シャワールームにはシャルルがいるはず

—— って、さっきのがシャルルなのか!?

そう言われてみればシャルルに見えなくもない。普段は縛っている髪をほどくとあんな感じなのだろう。だが問題はそこじゃない。

アスカ(なんでシャルルに胸があるんだ? そう、胸——)

さっきのあの姿が目には焼き付いて離れない。

アスカ(胸……きれいだっとな…… ってそうじゃないだろ!)

考えるな。考えるな。そう自分に言い聞かせる。

ガチャ……

アスカ「!?!」

気持ち控えめに開いた脱衣所のドアが開く音。しかし俺にはなにより大きく聞こえて、体がこわばってしまう。

「シャルル「あ、上がったよ……」

アスカ「お、おう」

背中越しに聞く声はやはりシャルルだった。そして振り向くとシャルル「……」

女子が、そこにいた。

アスカ「……」

シャルル「……」

気まずい、話し合うにも空気が悪すぎる。

アスカ「あー、なあ」

らちがあかないので俺から話しかけると、シャルルはびくつと身を震わせる。そんなにびっくりすることないだろ……？

アスカ「お茶でも飲むか？」

部屋へ帰る際にガッツイーグルから出た案を実行する。当の本人は何が起こつたのかわからず固まっているみたいだけど。

シャルル「う、うん。もらおうかな……」

お互い、何かしら飲み物があった方が話しやすいと思ったのだろう。ここにきて初めて意見の合致を見た。

だがお茶ができるまでの時間がまた沈黙の再来だった。

アスカ（はやく混ぜられよ、茶葉！）

アスカ「もう大丈夫だろ。ほら」

シャルル「あ、ありがと——きやつ」

湯飲みを渡すときに指先が触れ合って、シャルルが慌てて手を引つ込める。それで俺は湯飲みを落としそうになり、握りなおした反動で、お茶が手にかかってしまった。

アスカ「あちちつ。水水！」

水道を全開にして、だーつと流れ出す水で事なきを得た。

シャルル「ご、ごめん！大丈夫!?!」

アスカ「別に大したことじゃねえよ」

シャルル「ちよつと見せて…… ああ、赤くなってる。ゴメンね」
軽くパニックになっていっているのかシャルルは俺の手を強引に取って
お湯のかかった場所を痛々しげな表情で見つめる。

シャルル「すぐに氷貰ってくるね！」

アスカ「待て待て。その格好で外に出るのはマズイだろ。本当にこ
んなもんツバつけときゃ治るから」

シャルル「でも……」

アスカ「それより、さつきから胸が当たってるんだけど……」

シャルル「!!」

言われてやっと自分の体勢を理解したのか、シャルルは俺から飛び
退くと、胸を隠すように自分の体を抱く。

シャルル「……………」

弱々しくではあったが、女子特有の抗議の眼を送ってきた。

シャルル「心配しているのに…… アスカのえっち……」

アスカ「は!?!」

なんてこった。俺が、ウルトラマンダイナが悪者扱いである。嗚呼
なんとという冤罪! 全国のちびっ子たちは泣き出してしまっぞ!

しかし気のせいだろうか、シャルルの眼差しは抗議だけでなく、全
体的に恥ずかしそうでそのくせどこかで嬉しそうな表情をしている。

ま、俺の気のせいだろう。好きでもない男に触れられて嬉しい女子
なんかいないだろ。

アスカ「ふう、じゃあ改めて、なんで男のフリなんかしていたんだ
?」

シャルル「それは、その…… 実家の方からそうしろって言われ
て……」

アスカ「うん? 実家っていうと、デユノア社の——」

シャルル「そう。僕の父親がその社長。その人からの直接の命令
なんだよ」

どうにもさつきから妙な違和感がある。特に実家の話を始めて
から、シャルルの顔は曇りだしていた。

アスカ「命令って……親だろう？　なんでそんな——」
シャルル「僕はね、愛人の子なんだよ」

——。絶句してしまった。

シャルル「引き取られたのが二年前。ちようどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、デュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは、おそらくは言いたくはないであろう話をそれでも健気に喋ってくれた。

シャルル「父にあつたのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時は酷かったなあ。本妻の人に殴られたよ『この泥棒猫が！』ってね。参るよね。お母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あははと愛想笑いを繋げるシャルルだったがその声は乾いていてちつとも笑ってはいなかった。俺も流石に愛想笑いは返せないし、シャルルも望んでいないだろう。けれども何故だか怒りが沸々と湧いてきて、俺はそれをこらえるために拳をきつく握りしめた。

シャルル「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」
アスカ「え？　だってデュノア社って量産機ISのシェアが世界三位だろ？」

シャルル「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ISの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があつてやっと成り立っているところばかりだよ。それでフランスは欧州連合の防衛組織『イグニツション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

「そういやセシリアが『実稼働データを取るためにIS学園へ来た』って言ってたな。」

シャルル「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代を開発して

いたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

アスカ「話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

シャルル「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに——」
シャルルは俺から視線を逸らし、どこか苛立ちを含んだ声で続けた。

シャルル「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

アスカ「それって、つまりは——」

シャルル「そう、世界で唯一自我を持つISと、それを駆使する人物のデータを盗んで来いって言われているんだよ。あの人にね」

話を聞く限り、そいつは一方的にシャルルを利用しているのだろう。たまたまIS適応があつた、それなら使おうと、それくらいにしか感じていないだろう。

そしてそれはシャルル自身が俺なんかよりもずっとわかっているんだろう。だから父親のことなのに他人行儀で話すんだ。あれは、父親なんかじゃなく、他人なのだと。自らの中で区別するために。

アスカ（ふぎげんなっ！）

シャルル「とまあ、そんなところかな。でもアスカにばれちゃったし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

アスカ「……………」

シャルル「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメン」

アスカ「……………」

シャルル「……はあ…… やっぱりあのお話はおとぎ話だったのかな……」

アスカ「……『あのお話』って……？」

シャルル「昔、僕がまだ小さい頃にお母さんがよく話してくれたんだ。とっても格好いいヒーローの話」

アスカ「……… どんないヒーローなんだ？」

シャルル「そのヒーローはね、強くて、大きくて、そしてとっても優しくて、困った人の所へ必ず駆けつけてくれるんだ」

アスカ「………」

シャルル「その話を聞いて信じてたんだ。ヒーローは… 何処かに… 何処かにいてっ… 必ずっ… 助けに来てくれるっ… てっ…！」

話が終わる頃にはシャルルは泣き出していた。その少女の涙を見て決心した。

俺がこの子を救うヒーローになる。

アスカ「お前の母さんが話してくれたヒーローの名前って『ウルトラマン』じゃないか？」

シャルル「えっ…？ 知ってるの？」

アスカ「知ってるもなにも俺がそうだから」

シャルル「アスカが… ウルトラマンってこと？」

アスカ「そうだ。遠いところから困ってる人を助けに来たんだ」

シャルルの顔に一瞬だけ哀しみが消えるが、すぐにまた、哀しみに包まれた暗い顔になってしまった。

シャルル「嘘… そんな都合のいい話、信じられないよ……」

アスカ「嘘じゃな『ドガガガガガガ！』」

突如、外から爆音が鳴り響く。そしてPCが勝手に起動し、一人の男が映し出される。

シャルル「父さん…！」

シャルルはそいつのことを恨みをこめた声色でそう呼ぶ

アスカ「こいつがシャルルの親父か…」

四十代半ばを迎えた中年男性のようだが、全身から放たれる不気味なオーラ、そして全てを飲み込んでしまふような邪悪な笑みが特徴的だ。一目見ただけで悪い奴だとわかる。

ダイナ「やはり…：…そうか！」プシユン！ プシユン！
ダイナはそれをハンドスラッシュで相殺する。

エボリユノア「元々はISを強化し制圧する計画だったが、それすら必要なくなった！見よ！私の進化した姿を！」

エボリユノアの体は一回り程大きくなっており、指先に鋭い爪、肩に無数の棘、そして強靱な尻尾が現れた。

ダイナ「なんて奴…：…」

エボリユノア「遅いな！」

ドカアアアアン！

ダイナ「グワアアアアアアアアアア！…：…」

強烈なタックルを食らい跳ね飛ばされてしまった。

エボリユノア「まだ死んでもつらつては困るなあ…：…」

ガシユツ！ ガシユツ！ ガシユツ！ ガシユツ！

今度は爪で何度も、ダイナの体を抉るように攻撃する。

ダイナ「グワアアア…：…！」

エボリユノア「はははははは！あゝ楽しい楽しい！」

バシン！ バシン！ バゴツ！ ドゲシャ！ ドシャ！ ド

シャ！

追い討ちのように尻尾の攻撃がダイナを苦しめている。

ダイナ「うう！ くっ！…」

エボリユノア「はははははは…：… うっ、くっ、ああ！ガアアアアア！」

ドガドガドガドガドガドガ！！！！

しかし、突然苦しみだしたエボリユノアが無差別に破壊活動を始めた。

ダイナ「…：… やっぱり…：… そうなったか…：…。」

シャルル「なんで急に破壊活動を…：…？」

「簡単さ。エボリユウ細胞を制御できなかったのさ」

シャルル「！ だ、誰?！」

ダイナ（なんか喋り方が変だ。無意識に言っているのか？）

エボリユノア「グガアアアアアア!!」バリバリバリ!!

ダイナ「グオオオオオオ!!」ピコン ピコン ピコン

最大出力の電流を浴び、とうとうダイナのカラータイマーが鳴り始めた。

ダイナ（くっ！抜け出そうとしても… 力が！）

エボリユノア「フフフ、タオス、ケス、コロス！」

ダイナ（くそ！もはやこれまでか…？）

シャルル「アスカアアアア！」バギユン バギユン

そのとき、二発の光弾がエボリユノアに命中した。

ダイナ「！」

エボリユノア「!?」シュウウウ

弾の軌道を見返すと、そこにはISを装着したシャルルが立っていた。

シャルル「アスカ、約束したでしょ？ 僕を守ってくれるって！」

ダイナ「勿論だ！ヒーローは約束は破らねえ！」

シャルル「そうだよ。だから… もう一個約束して…？」

ダイナ「なんだ？」

シャルル「後で僕に怪我の治療をさせて欲しいなあって…」

照れた顔で、でもしつかりとアスカに話す。

ダイナ（そうだ。何を迷っていたんだ… 俺は、俺はこの子を守るんだろ！）

ダイナ「うおおおおおおお!!!」ピカーン！

ダイナの額のクリスタルが赤色に輝く。!

エボリユノア「グ!」

ダイナ「ダアアアアアアッ！」ダーン！

そして、ダイナは赤いボディに銀色のラインが入った超怪力戦士、【ストロングタイプ】にチェンジした。

ダイナ「ドリヤアア！」ブチン！ ブチン！

体に巻き付いていた腕を引きちぎる。

エボリユノア「グガアアア！」ブイン！

今度は尻尾を振り回す攻撃に出たが、

ダイナ「フンッ！」ガシッ！

がっちり尻尾をダイナに掴まれる。

ダイナ「うおおおおおおお！」ブイン！ ブイン！ ブイン！ ブ
イン！ ブイン！

それを思い切りジヤイアントスイングし始めた。

シャルル「あんな巨体を…… 凄いなあ」

ダイナ「どりゃあああ！」ドツシーン!!!

そして投げ飛ばすのではなく、地面に叩き付けた。

エボリユノア「グゲアアアアアア！」ダツダツダツダ

しかしエボリユノアはすぐさま起き上がり、ダイナのもとへ駆けて
きた。

ダイナ「まだやるか！」ダツダツダツダ

ダイナも同じく、エボリユノアのもとへ駆けていく。

ダイナ「うおおおおおおりゃあああああ!!」

ドカ！ボカツ！ドス！ドス！ドン！

エボリユノアの攻撃をもとめせず強烈なパンチを決めていく。

エボリユノアも負けじと火炎攻撃を繰り返す。しかし、

ダイナ「効かねえよ!!!」ブワッ

全て体で受け止めてはね返してしまった。

ダイナ「フンッ！」グシャ！

口にパンチを突っ込み、火炎機能を破壊した。

ダイナ「見たか俺の超ファインプレー！」

エボリユノア「グフッ!……グ、ガ……」

エボリユノアは満身創痕と化している。

ダイナ「これでとどめだああああ！」ボツガーン！

体中のエネルギーを込めた本気のアツパーでエボリユノアは空高く
打ち上げられた。

ピュイイイイン！ボツガアアアアアアアアアン!!!

そして大爆発をおこして空の塵となって消えた。

ダイナ「ふうー…… 勝ったぜ！」b

シャルルに向かって大きくサムズアップをする。
シャルル「うん！やっぱヒーローだね！」b
シャルルも同じようにダイナヘサムズアップをした。

ばれないようにそーっと戻ってきて、今は怪我の治療中である。

アスカ「痛っ！」

シャルル「あ、アスカ動かないでよ〜」

アスカ「だから大丈夫だって！」

シャルル「大丈夫じゃないよ、こんなに怪我して〜！それとも約束破るの……？」

アスカ「うっ……」

反則だろ…… あんな顔で迫られたら卒倒ものだろう。

アスカ「…… おねがいします……」

負けた。完敗だ。

シャルル「はい」

妙に上機嫌だな……

アスカ「なあ、シャルル」

シャルル「何？」

アスカ「これからどうするんだ？」

シャルル「どうするって…… 時間の問題じゃないかな。フランス政府も今回の真相を知ったら黙っていないだろうし、代表候補生をおろされて、よくて牢屋かな」

アスカ「それでいいのか？」

シャルル「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないからね、仕方がないんだ」

アスカ「…… だったら、ここにいろよ」

シャルル「え？」

アスカ スウウー「特記事項第二一！本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない！本人の

同意がない場合、それらの外的侵入は原則として許可されない！」

腹の底から声を出して特記事項を暗唱した。普段はまったく出てこないのに、今は気持ちの悪いくらいすらすら暗唱できた。

アスカ「つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だ。その間に、なんとかなる方法を見つけていけばいいさ。焦る必要もないだろ？」

シャルル「へー、よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

アスカ「こうみえても記憶力はいいんだぜ」

シャルル「そうらしいね。ふふっ」

おお！笑った！ 屈託のない、十五歳の女の子の笑顔だ！

アスカ（なんか、ドキドキすんなあ）

改めて見ると、シャルルは顔立ちの良さもあるが、何よりも優しい雰囲気がある。それが俺の目にはとても可愛く映ってしまった。

アスカ「と、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えてみてくれ」

シャルル「うん。そうするよ」

アスカ「へへっ……」

シャルル「どうしたの？急に笑ったりして」

アスカ「ん？ああ、親父みたいな上司に言われた言葉を思い出してな」

シャルル「ふーん。ちなみにどんな言葉？」

アスカ『ピッチャーは孤独だつて言うが、俺はそうは思わねえ！マウンドの中央が高くなっているのは仲間にその背中がようやく見えるようにだ！頑張れ！負けるな！そんなみんなの声援が一番届く場所なんだ』って」

シャルル「良い言葉だね」

アスカ「ああ、俺もそう思うよ」